

尾張徳川家麻布富士見町邸(上)

——ヤン・レツル設計長與男爵邸から尾張徳川邸への変遷——

香山里 絵

はじめに

一 長與男爵邸

- (一) 長與専斎と称吉
- (二) 長與男爵邸資料と竣工年代
- (三) ヤン・レツルと長與男爵邸
- (四) 大日本私立衛生会会堂と長與称吉
- (五) 東京勸業展覧会建築図案展覧会と長與邸の評価
- (六) 第一次世界大戦とレツル

二 尾張徳川家麻布富士見町邸

- (一) 長與邸選定
 - (二) 前半期の邸内
 - (三) 後半期の邸内
 - (四) 麻布富士見町邸からの転居
- (以下、次輯予定)

三 駐日フランス大使館の麻布移転

尾張徳川家麻布富士見町邸(上)

四 麻布富士見町邸の茶席(現在の心空庵)について
おわりに

はじめに

大正二年(一九一三)七月十一日、尾張徳川家(以下、「尾張家」と略称する)第十九代当主である侯爵・徳川義親(一八八六―一九七六)は水道端・小石川邸から麻布富士見町三十三番地(現在の港区南麻布四丁目十二)に転居し、昭和六年(一九三一)二月までの十六年半、二十代後半から四十代前半までの時期を過ごした。

尾張徳川家麻布富士見町邸(以下、「麻布富士見町邸」と記す)の主屋である本館(挿図1)は、広島県の原爆ドーム(旧広島県物産陳列館)と同じチェコ人の設計家、ヤン・レツル(Jan Letzel 一八八〇―一九二五)による「長與男爵邸」(以下、「長與邸」と記す、挿図2)として知られている。男爵・長與称吉(一八六六―一九一〇、以下「称吉」と記す)はこの建物をレツルエンドホラ合



挿図1 尾張徳川家麻布富士見町邸 本館 外観西側

図版典拠は文末に記す



挿図2 長與男爵邸 本館 外観西側

資会社（以下、本論ではこの表記に統一する）^①に発注し、明治四十三年（一九一〇）五月に入居した。しかし前年末から罹患していた病のため称吉は同年九月五日に逝去し、同四十五年四月十五日尾張家は称吉の長男であり、当時十三歳だった立吉（八九八―一九五七）より購入した。^②

尾張家は大幅な増改築を行った上で、大正二年からこの邸宅を使用した。高台にそびえるドイツ風の本館のテラスからは、遠くに同じレツルエンドホラ合資会社による聖心女子学院校舎を望むことが出来た（挿図3）。徳川生物学研究室と林政史研究室が開設されたのはこの麻布富士見町邸である。ここにはスズキ・メソードの創始者鈴木鎮一（二八九八―一九九八）が寄留し、アナーキスト石川三四郎（二八七六―一九五六）が義親の娘たちの家庭教師として過ごし、またアイヌの父と呼ばれるジョン・バチエラー

（二八五四―一九四四）が上京時に滞在した。しかし尾張家は昭和六年二月にフランス大使館建設用地として供するために手放している。

麻布富士見町邸に関してはあまり紹介されたことがない。^③本稿では麻布富士見町邸の長與邸としての成立、尾張家としての使用時期、フランス大使館への譲渡、そして徳川美術館に移築され現存する茶席（現在の心空庵）の四つに分けて、尾張家の



挿図3 麻布富士見町邸本館からの景色

歴史の中における麻布富士見町邸の存在と意味を捉えなおすと共に、同邸を華族史、建築史、駐日大使館の歴史といった文脈において位置づけることを試みる。

一 長與男爵邸

（一）長與専斎と称吉

長與家は肥前国大村藩に仕えた漢方医の家系である。長與専斎（一八三八―一九〇二）は大村藩の侍医であったが、文久元年（一八六一）長崎の医学伝習所でオランダ人医師ボンベ及びマンフェルトに師事して西洋医学を学び、明治元年長崎精得館の医師頭取に就任した。同四年に岩倉遣欧使節団の一員として渡欧してドイツやオランダを視察、帰国後文部省医務局長、東京医学校（現在の東京大学医学部）校長に就任、東京司薬場（現在の国立医薬品食品衛生研究所）を創設した。同八年内務省衛生局初代局長に就任、衛生思想の普及に尽力した。その後も元老院議員、貴族院議員、宮中顧問官などを歴任し、同三十五年九月八日に歿した。^④



挿図4 長與称吉肖像

専斎の長男でありこの麻布富士見町に邸宅を建てた称吉（挿図4）もまた医学の道に進み、東京帝国大学医科を経てドイツ・ミュンヘン大学とヴュルツブルク大学医学部に留学、一八九三年同地で医学博士号を取得して帰国した。帰国後、日本橋で開業、明治二十九年には麹町区内幸町に移り長與胃腸病院を開院、同三十一年には東京帝国大学に論

文を提出し医学博士を取得した。⁽⁵⁾また同年十二月十七日に胃腸病研究会(現在の日本消化器病学会)を創立、会長となり、また日本癌研究会理事長等を務めた。同四十二年冬に神奈川県片瀬の別邸で腹膜炎を発症、⁽⁶⁾療養中の翌四十三年八月二十五日亡父の功績により男爵を受爵、翌日従五位に叙されたが、⁽⁷⁾腎膜炎・脳膜炎を併発し、九月五日に四十五歳で逝去した。葬儀は同月十一日午前九時に麻布富士見町の自邸を出棺、青山墓地にて仏式で行われ、千五百名あまりが参列した。⁽⁸⁾尚、称吉が大日本私立衛生会の会頭を務めた人物と紹介する文献もあるが、大日本私立衛生会の記録にはなく、専斎の経歴の誤認と思われる。

明治四十三年の称吉の受爵や訃報を伝える新聞や雑誌には、長與邸や称吉の人となり伝える記事も存在する。⁽⁹⁾その一つによると、称吉は病弱で毎週末を片瀬で過ごし静養していたという。大病院を経営して極めて多忙な身であったため、格別取りたてて紹介するほどの逸事や道楽もない。ピリヤードの腕前が医師会では右に出るものがないほど、また園芸、特に蘭に凝って自邸に三千円をかけて温室を作り、また書生を養成するのの一つの道楽としていたという。⁽¹⁰⁾温室をつくり、書生を置いていたことがわかるこの邸宅こそ、称吉の唯一の道楽だったのであろう。

(二) 長與男爵邸資料と竣工年代

長與邸の記録や資料は子孫には伝わっていない。⁽¹¹⁾称吉の弟である白樺派の小説家、長與善郎(一八八八―一九六二)は昭和三十八年(一九六三)に記した『わが心の遍歴』に以下の通り記す。

当時は他に競争者のなかった胃腸病専門の流行り医者であった称吉は、元来病弱であったのだが、まだ満四十四歳という働きざかりで、

間もなく自分が死のうとは予想し得なかったのである。病気は腹膜炎で、結核的な点少したちは悪いが、なに、やがて癒らう。恢復さえすればいくらかでも楽に稼げると、自信たっぷりなので、数年前豪壮な別荘を腰越に建て、その次ぎには六千何百坪という見晴らしのいい高台の土地を麻布富士見町で手に入れて大いに悦び、後にフランス大使館となった、無闇に大きく贅沢な住居や温室を新築したりする豪放さのため、持ち金が足らなくなり、空株に手を出したのが悪かった。当座凌ぎのつものり、その坊ちゃんらしいやりくりがまんまと株屋のいい食いものとなり、死ぬと同時にまだ木の香のする家をあわててたたき売らねばならぬ羽目となったのだった。⁽¹²⁾

長與邸の竣工年代を特定する記録は未見である。同年代の麻布富士見町周辺の地図や地誌にも長與邸は収載されていない。『わが心の遍歴』からも麻布富士見町の土地は新築にあたり新規購入した場所と考えられ、早い段階で尾張家所有となったことから、長與邸が存在した記録はあまり残されなかったと考えられる。

鈴木博之・初田亨編『図面でみる都市建築の明治』⁽¹³⁾では竣工を称吉の歿後となる明治四十四年(一九二一)頃とする。また菊楽は建物の竣工年代を同四十三年五月以前とし、その理由として(一)四十二年十月三十日のレッスルの書簡の中に、その時点での注文として「聖心女子学院十三万千円」、「雙葉高等女学校十六万円」、「大日本私立衛生会七万五千円」、「長與男爵邸三万六千円」という記述があること、⁽¹⁴⁾(二)明治四十三年五月発行の『建築雑誌』掲載の時報「近年新築の邸宅」に長與邸が挙げられることの二つを挙げる。⁽¹⁵⁾(一)については揺るぎない資料であるが、(二)は根拠とするには不十分である。⁽¹⁶⁾

しかし今回調査を進める中で、称吉が明治四十三年五月に麻布富士見町邸に入居したことが、転居通知により明らかになった。⁽¹⁷⁾ 転居前、称吉は「麹町区内幸町一ノ三」の長與胃腸病院の隣に居住している。⁽¹⁸⁾ 発病して療養していたのは腰越の別荘であったと考えられるが、五月から亡くなるまでの四か月弱をこの麻布富士見町邸で過ごしたと考えられる。この入居時期から考えるならば、菊楽の指摘通り、長與邸の竣工は明治四十三年五月前後と考えるのが妥当であろう。入居は必ずしも竣工を示すものではない⁽²⁰⁾が、入居時期が一つの目安になると考える。

(三) ヤン・レッツルと長與男爵邸

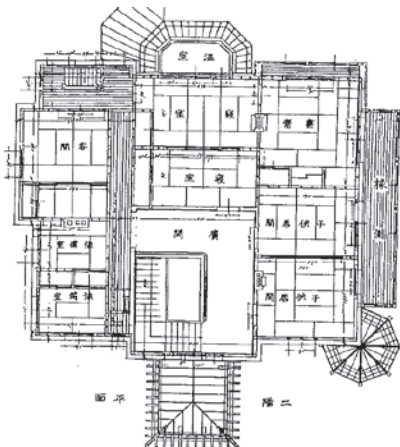
尾張家が購入した際の記録資料によると、長與邸の敷地は六一八九坪一九合、内宅地が二二五坪一九合、山林が一町三反一畝四歩であった。⁽²¹⁾

敷地の北側、天現寺を見下ろす斜面の上部が宅地であり、レッツル設計の煉瓦造二階建の本館(建坪一階八〇坪五合、二階七九坪二合)、本館東側に連なる木造瓦葺平家建の日本館(建坪一四六坪九合九夕)・煉瓦造倉庫一棟(二階建、一階・二階共に八坪七五合)・木造平家建門番所一棟(建坪二二坪)・木造平家洗濯場一棟(建坪六坪)・木造平家建物置一棟(建坪二二坪五合)・木造平家建便所一棟(建坪六合五夕)・木造平家廊下一棟(二坪三合二夕)・木造平家温室一棟(建坪四坪四夕)・木造平家長屋一棟(建坪一七坪五合)を購入したと記録されている。また木造硝子張植木室平家一棟(建坪五一坪)があった。⁽²²⁾

明治四十四年から五年にかけて『建築世界』に長與邸は紹介されている。⁽²³⁾

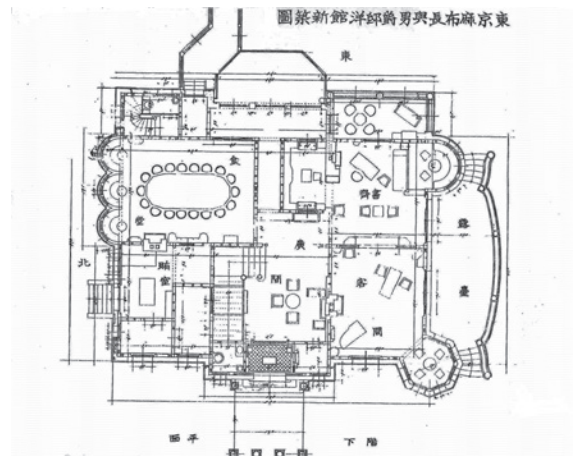
本館の図面五枚(挿図5、6)、外観写真四枚(挿図2・7)、一階の内観写真七枚(挿図8)、温室の写真二枚が掲載される。

レッツル設計の煉瓦造り二階建ての本館は基礎を木骨とし、外壁は一階を



5-2 二階

挿図5 長與邸 本館 平面図



5-1 一階



7-1 北側



6-1 正面建図



7-2 南側



6-2 横断面図



7-3 東側



6-3 側面一部詳細

挿図7 長與邸 本館 外觀

挿図6 長與邸 本館 立面図

尾張徳川家麻布富士見町邸(上)

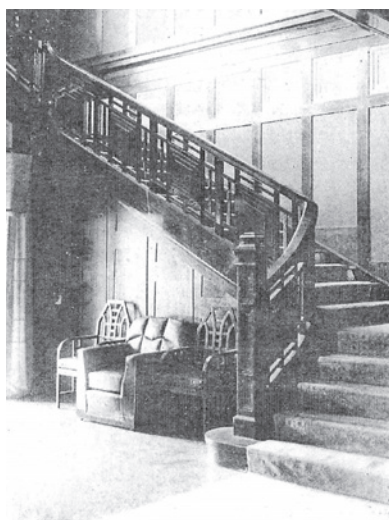
長與男爵設計圖



8-2 応接



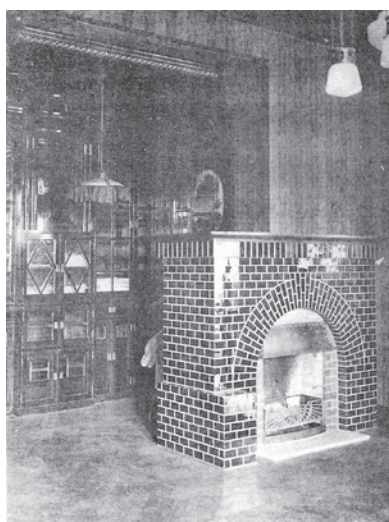
8-4 書斎



8-1 広間(ホール)



8-5 食堂



8-3 書斎

挿図8 長興邸 本館 内観

整層切石積み、二階を乱積みに、その上を薄い切石で積んでいる。「ドイッ風の大屋根をもつマツシブな邸宅」と紹介される通り⁽²⁴⁾、寄棟に半切妻を組み合わせたような大きな屋根が印象的であり、西側の玄関上、東側、北側の屋根はいわゆる「ドイッ破風」となっている。南西の角には五角六面の応接室があり、深さをもった別屋根が設けられ、建物を印象づけている。建物南側にはテラスがあり、東側にはガラス張りの温室がある。また東と北側面には三階に当たる高さの軒下に窓が見られ、横断面から屋根裏まで階段で上がれるようになっていた様子がみられる。

平面図を見ると、一階は玄関を入った中央の空間が広間(ホール)となり二階への階段があり、南側に客間と書斎、北側に食堂と賄室があり、東に温室が設けられている。いずれも洋室であることが写真からも確認できる。それに対して二階は全面畳貼りの和室である。南面には十二畳半の書斎と十畳、十二畳半の子供居間があり、中央に十二畳半と九畳の寢室が東から二室並べられている。称吉夫妻と三人の子どもの生活空間であったと考えられる⁽²⁵⁾。廊下をはさんで北側に十畳の客間と予備室が二室ある。子供部屋と書斎のある南面には二階であるにも関わらず「縁側」が設けられている。

温室の隣から渡り廊下を経て東に日本館が建てられている。長與邸の図面と写真は本館と温室に限られており、日本館をはじめとする他の建物はこの写真と尾張家が購入した際の契約書以上に確認できない。温室は六棟あったが、尾張家に引き渡すにあたり取り壊された。

長與邸本館の設計者であるレッツルは昭和四十年代にチェコスロバキア(現在のチェコ共和国)出身であることが確認され、チェコに残された資料の確認がなされ、生涯が明らかになっている⁽²⁶⁾。菊楽によれば、一八八〇年九

月四日、チェコのポーランド国境に近いボヘミア・ナーホト(Nachod)に生まれ、一九〇〇年プラハでプラハ工芸美術大学に入学、ヤン・コチエラ教授(Jan Kotera 一八七一一一九二三)の指導を受けた。一九〇四年に卒業後、プラハのベルスキー(Quido Belsky)の設計事務所、エジプト・カイロのパスカ(Eduico Pascha)設計事務所で働いた後、明治四十年七月十二日にゲオルグ・デ・ラランデ(George de Lalande 一八七二一一九一四)建築事務所の設計士として来日した。同四十二年、同じくチェコ出身のカレル・ヤン・ホラ(Karel Jan Hora 一八八一一一九七三)とレッツルエンドホラ合資会社を設立、東京市銀座出雲町三番地に事務所を開設した。この年から翌年にかけて、聖心女子学院本館、築地精養軒新館、雙葉高等女学校校舎、大日本私立衛生会、小石川関口台天主教会(現在の東京カテドラル協会)のルルドマリアの洞窟が竣工した。大正二年(一九一三)六月会社は解散し、九月にホラは帰国したが、八月に宮城・松島パークホテルが竣工、その後も同五年までに上智大学校舎、広島県物産陳列館(原爆ドーム)、ブライアン邸、上野精養軒、宮島ホテルが竣工した。同四年暮れ、レッツルの設計事務所は閉鎖され、同六年十月、上野精養軒が暴風で倒壊して以降、レッツルの建築活動は休止するという。同八年、レッツルはチェコスロバキアの在京公使館付商務官に就任したが、翌年帰国し退職する。同十一年秋に再来日し、大手町の丸ビルで商社を経営している時期に関東大震災に遭遇した。震災の年の暮れ、横浜から日本を離れ、その三年後、同十四年十二月二十六日にプラハで四十五歳で病死した。

レッツルが来日した時期、生地ナーホトも教育を受けたプラハもオーストリアAハンガリー二重帝国の支配下にあり、レッツルはオーストリア旅券で来日した⁽²⁷⁾。チェコスロバキアの独立は日本滞在中の一九一八年である。レ

ツルは当時の日本の記録の多くでドイツ人と記されるが、デ・ラランデ建築事務所の設計士として来日したことから、自分の国籍の説明を嫌った本人がそのような謳った可能性もあると考えられる。

(四) 大日本私立衛生会会堂と長與称吉

称吉は何故自邸の設計をレツルに依頼したのであろうか。称吉は九年にわたりドイツに留学していた。これまで、デ・ラランデへの発注者の多くがドイツへの留学経験を持つことが指摘されており、明治四十一年一月レツルはデ・ラランデ事務所の代理人となることから、デ・ラランデ事務所と客層はほぼ同じであるとの指摘もなされている。⁽²⁸⁾しかし称吉は自邸とほぼ同時期に、父専齋が設立し自身も評議員を務めた大日本私立衛生会会堂の設計もレツルに依頼している。専齋の息子とはいえ称吉の留学経験のみで大日本私立衛生会の設計を発注できたとは考えられない。大日本私立衛生会について、ここで確認することとしたい。

大日本私立衛生会（現在の日本公衆衛生協会）は明治十六年五月二十七日に京橋木挽町の旧明治会堂で設立された。⁽²⁹⁾設立時の会頭は佐野常民、副会頭は長與専齋である。明治政府では、同八年に内務省衛生局が設けられ、同十二年には中央衛生会が設けられていた。そのような中、同十四年には民間団体設立の機運が高まり、二年後に設立された。設立総会には千二百五十人が参加したという。会の目的は「全国民の健康を保持増進する方法を討議講明し、一には衛生上の智識を普及し一には衛生上の施策を翼賛するに在り」とし、「本会の目的を賛成履行」する会員を募った。⁽³⁰⁾終身会員は二十円の一括納入、通常会員は一年二円の納入が求められた。同二十八年四月には名誉会員一人、終身会員百六十六人、通常会員

四千百十三人に及び、北海道から九州まで六十四支部が立ち上げられていた。⁽³¹⁾

同会は明治十九年七月二十七日以降、京橋（京橋区宗十郎町六・九番地、現在の銀座七丁目）に事務所を置いていた。⁽³²⁾会員が増加し全国に支部が出来啓蒙活動が活発化する中、同三十八年には大日本私立衛生会は「理想的公会堂」の建設を期待していたことがわかる。

理想的公会堂

大日本私立衛生会に於ての東京市中に完全なる公会堂なきを遺憾とし今回数万円を投じ同会に於て理想的公会堂を建設することに内定し過般準備中なりと云ふ。⁽³³⁾

おそらくこの時期から同会ではそのような機運が高まっていたのであろう。同会での公会堂建設についての最初の記録は明治四十年五月の第二十五次総会であり、ここで事務所の移転計画が報告された。

次に一応お耳に入れて置きたいことは本会事務所移転の事であります。是は御承知の通り、全体を通じて九十六坪三合と云ふ極く狭小な家でありまして、且つ其建築などが衛生会の建築としては甚だ面白からざる所もありますし、不便少なからざること多いので、評議員会の決議を経まして、何れ現在の家を処分して、他に転ずるという方法を執りたいと云ふ当事者の考であります。⁽³⁴⁾

この報告では未だ移転が具体化していないように思えるが、この報告の二日後に開催された評議員会で移転の決議が行われ、その三日後の同月三十一日、大日本私立衛生会は日本貿易協会と売買契約を締結し同日京橋の土地建物を引き渡し、六月三日には仮の移転場所である芝区芝公園第七号地十二（現在の港区芝公園）に移転した。⁽³⁵⁾

その後、公会堂及び事務所の土地の取得交渉が行われた。敷地は新たに大手町にある宮内省御用地、内務省用地の無償貸下げを申請、同四十四年九月、二十年の無料使用が許可された。⁽³⁶⁾これを承けて同年十二月二十三日の評議員会で評議員の中から新営工事の建築委員として称吉・三島通良(一八六六―一九二五)・山根正次(一八五八―一九二五)の三人が選ばれ、四十二年一月十二日から建築委員会が開かれた。評議員会も毎月開催され、同年五月二十三日の第二十七次総会で建物はレツルの設計が採用されること⁽³⁸⁾が報告された。

大日本私立衛生会会堂の起工は四十三年九月、完成は当初四十四年五月の第二十九次定期総会に間に合う予定であったが、一か月遅れ、落成式は定期総会と共に同年六月二十五日に開催された。

落成式での理事長医学博士金杉英五郎の報告がこの建物の詳細や建築経緯を示しているのでここに引用する。

大日本私立衛生会本館其他ノ竣成ニ方リ茲ニ其工事ノ概要ヲ報告セン
トス

明治四十一年九月麴町区大手町一丁目所在内務省用地百四十四坪同十二月宮城御料地百八十坪合計三百二十四坪ノ土地拝借ヲ許可セラレ四十二年二月其引渡ヲ受クルヤ評議會ノ決議ヲ経テ評議員中ヨリ建築ニ関スル委員三名ヲ選挙シ之に理事長理事ヲ加ヘ副会頭ヲ議長トシテ委員会ヲ開クコト十数回、其結果本館ハ技師独逸人ヤン、レツルノ設計図案を採用スルニ決シ遂ニ評議會ノ承認ヲ得テ「レツル、エンド、ホラ」合資会社ニ工事一切ヲ受負ハシメ四十四年九月創メテ工ヲ起セリ、其ノ構造ハ欧州近世式ニ拠レル石及煉瓦造銅板葺二階建ニシテ小屋組ニ鉄材ヲ用ヒ軒高地盤ヨリ四十二尺一寸五分丸屋根上高同六十八

尺一寸五分面積横最長八十八尺縦最長六十八尺五寸此建坪百十七坪七合五勺六才、一階ハ之ヲ正面及左右玄関、貴賓室、役員室、会議室及左右休憩室ニ二階ハ之ヲ会堂及左右附属室ニ二階棧棚ハ之レヲ傍聴席及左右附属室ニ区画シ各階皆必要ノ廊下洗面所等ヲ備ヘ二階会堂ニハ約四百五十、三階棧棚ニハ約百五十合セテ約六百ノ会衆ヲ容ル、ヲ得ベク今四十四年五月全ク其工ヲ竣リ工費四万八千二百二十五円八十銭ヲ要セリ又事務所、供待所、外便所、外廊下等ノ附属建物ハ木造瓦葺又ハ亜鉛引鉄板葺ニシテ四十二年八月以降囑託技師ヲシテ逐次設計セシメ今四十四年六月本館ト相前後シテ工ヲ竣ヘタリ其建坪六十坪一合五勺外ニ周囲鉄石柵境界敷石等ヲ併セ工費五千九百六十九円三十六銭ヲ要シタリ即チ既設建坪合計百七十七坪九合〇六才此工費合計五万四千百九十五円十六銭ニシテ其外ニ裝飾其他設備費七千四百十八円二銭及未附属建物工費予算五千二百四十一円ヲ加フレハ其費額総計六萬六千八百五十四円九十八銭トナル

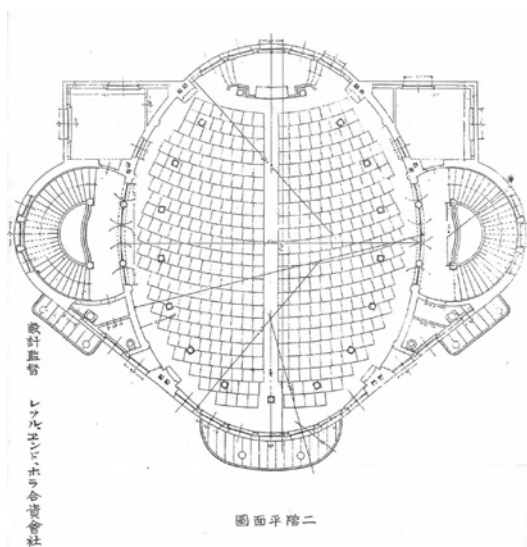
建築ニ関スル委員ハ当初長與、山根、三島ノ三評議員ナリシガ後チ緒方、山根ノ二評議員トナレリ其中最モ本館ノ新営ニ尽力セラレタルハ長與評議員ニシテ技師ヤンレツルモ同評議員ノ推薦ニ係リ随テ設計図案ニ関スル交渉等同評議員ヲ煩ハスコト多カリシガ不幸ニシテ中途ニ豎ノ為メニ侵サレ今日ノ竣成ヲ觀ル能ハザリシハ遺憾ニ堪ヘザル所ナリ

謹ンテ工事ノ概要ヲ報告スルコト斯クノ如シ

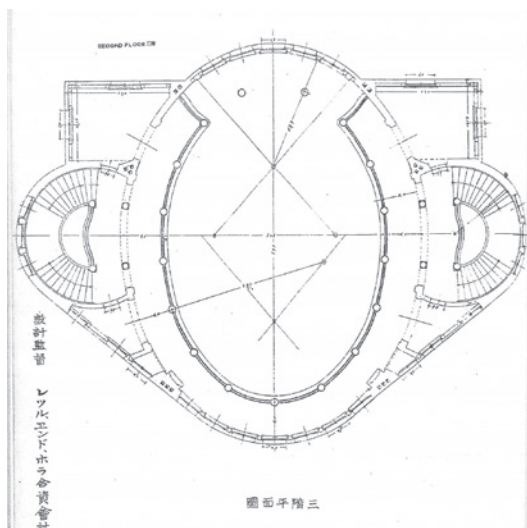
明治四十四年六月廿五日

大日本私立衛生会理事長 医学博士 金杉英五郎⁽³⁹⁾

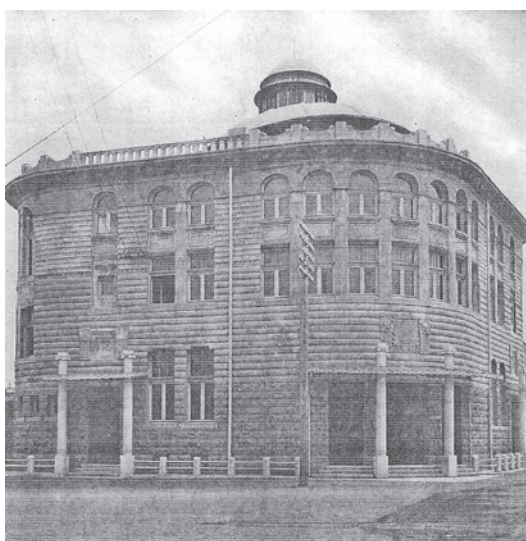
大日本私立衛生会の建物は「欧州近世式」の煉瓦造りで(挿図9)一階に



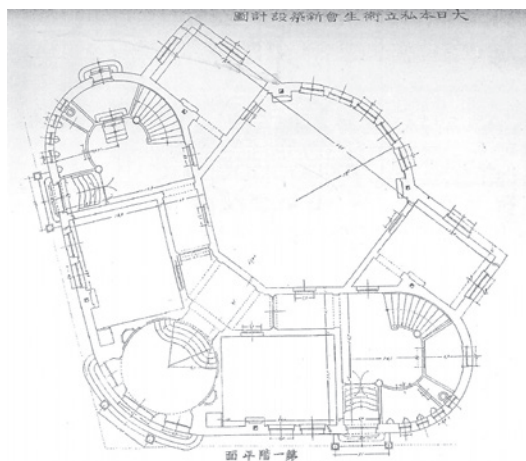
10-2 二階



10-3 三階



挿図9 大日本私立衛生会 外観



10-1 一階

挿図10 大日本私立衛生会 平面図

役員室・会議室・休憩室等があり、二階に会堂を有する。六百人を収容する楕円形の大きな会堂は上階に棧棚がある二層構造であり、設計図面では三階建である(挿図10)。この会堂の完成は新聞にも取り上げられ、東京の代表的な会堂として大日本私立衛生会の集会だけではなく他の集会にも貸し出された⁴³。

では大日本私立衛生会では設計をレツルに依頼することをどのように決めたのであろうか。金杉は称吉がレツルを推薦し、設計図案の交渉も行っていたとするが他に記録はない。称吉は建築委員の一人として交渉を担当していたが独断でレツルへの発注を決めたわけではないだろう。

大日本私立衛生会には「審事委員」という制度があり、公衆衛生科・私己衛生科・学校衛生科・軍陣衛生科・海上衛生科・精神衛生科・医学科・薬学科・化学科・疫病科・統計科・法律科・経済科・土木科・工業科・救済科・獣疫科の十七科があった⁴⁴。審事委員は会員の質問に答える他、明治二十年九月以降は実地調査も行っていた⁴⁵。設立時、土木科の審事委員には、土木の専門家である古市公威(一八五四―一九三四)・石黒五十二(一八五

（一九二二）・ウィリアム・キンモンド・バートン（William Kinnimond Burton 一八五六～九九）と、建築家である辰野金吾（一八五四～一九一九）・妻木頼黄（二八五九～一九一六）・山口半六（一八五八～一九〇〇）の六人の名前がある。新会堂建設が決まる明治四十二年、土木科の審事委員は石黒・辰野・古市の三人となっていた。⁽⁴⁴⁾ 大日本私立衛生会の活動には彼ら審事委員の意見が反映されていたと考える。

明治三十年代半ばまでの『大日本私立衛生会雑誌』には住宅に対する衛生方面からの言説がいち早く掲載されており、「医学会が住宅に対し、早い時期から積極的且つ具体的に批判と提案を試みている様子が窺える。湿気の排除、室の機能分離、椅子座の効用、採光の重視、水回りの清潔など、その後の主だった課題とともに当時の対処法を早くから読み取ることが出来る」との指摘がある。⁽⁴⁵⁾ 例えばドイツベルリンで行われた「第十四回万国衛生学及び「デモグラフィキー」会（明治四十年九月二十三日～二十九日）に大日本私立衛生会は日本家屋模型を出品しており、模型には左記の説明が付けられていた。

日本風家屋平面図説明

一、口絵平面図は現時本邦に於ける紳士の住宅を標準として之を模型に製作せんが為め考案したるものにして其建坪百二十五坪五合内二階家四十一坪五合平家七十八坪五合土蔵五坪五合とす。

一、本家屋各室の配置構造は大体に於て光線射入の平等、空気流通の自由、鼠族棲息の防止等衛生上一定の需要に適應せるを以て目的と為せり其工事仕様の大概を列記すれば左の如し。

光線の射入に關しては座敷、書齋、客室等主なる居室は其位置を東南方に面せしめ且中庭を設けて側面若くは背部の採光に便にし以て其

平等を期せり、空氣の流通に關しては前記光線射入の構造に伴ひ之を自由にして得べしと雖ども尚縁側通長押上蟻壁窓の外疊廊下の部分其他各室にも同様の窓を設け以て換氣の十分ならんことを期せり。

鼠族の棲息に關しては建物周囲の地形に「コンクリート」を用ひ其上に側石を据へ床下は全て「敲き」となし其周辺に多数の換氣孔を設て之に金網を張り且板戸を附し以て其防止を期せり、此板戸は夏季には之を開放し冬季には之を閉鎖すべき者とす。

又床下入口を設け掃除の便に供せり、是等の構造は單り防鼠に適するのみならず床下の防湿及清潔を保持する上に於て多大の利益ありとす。

尚万一一鼠族の天井裏に侵入したるとき之が捕獲に便せん為め天井の一部に上り口、屋上に明り取兼空氣拔窓を設け、台所必要の部分は金属板を以て被包し、其窓には金網を張り汚水排出土管口には鑄鉄製の網を嵌入し以て防鼠に遺憾なからしめたり。

其他書齋、応接室及客間の一半は之を化粧床板張とし卓子、椅子等を配置するに便時以て日常坐臥の快適を計り。

屋根は総瓦葺（縁側廻りは銅板葺）表見附入母屋造、玄關は式臺付とし本邦固有建物の風趣を存し土蔵は厚壁磨塗とし本邦耐火建物の構造を示したり。

設計技師 佐藤豊次郎、製造請負人 曾根英雄、（二部句読点筆者）⁽⁴⁶⁾
設計を担当した佐藤豊次郎は明治十七年に宮内省皇居御造営事務局に勤務、同二十年一月から同二十八年十二月までに臨時建築局技手、その後臨時陸軍建築部技師として勤務し、伊藤忠太序の明治四十三年七月発行『和洋住宅建築図集』の閲者としても名前を連ねている。⁽⁴⁷⁾ このように大日本私

立衛生会の活動において、家屋の衛生面の啓蒙も重要な課題の一つであった。

大日本私立衛生会の会堂建設は「理想的な新会堂」を作ることと目的とし、先に引用した通り、狭小な事務室、「不便少なからざる」、「衛生会の建築としては甚だ面白からざる所もある建物からの脱却を謳っている」⁽⁴⁸⁾

この「理想的」が指し示すもの、そして旧建物が「衛生会の建築としては甚だ面白からざる所」が指すところは、おそらく大日本私立衛生会が啓蒙していた「衛生」の概念ではなからうか。それまで大日本私立衛生会が利用していた建物は煉瓦造りの洋風建築で、大日本私立衛生会の後に入居した日本貿易協会によれば「所謂昔の二等煉瓦」の建物であつたらしい。⁽⁴⁹⁾ この建物は日本貿易協会により大正十二年まで使用されている。おそらく明治初期に建設され、大日本私立衛生会が推奨、啓蒙する衛生概念は反映されていなかったと考

える。レツルが設計する建築物はドイツ風の外観というだけではなく、当時の欧州の建築上での「衛生」概念を反映していたため、ここで設計者として選定されるだけの説得力を持ち合わせていたのではなからうか。その時点での「衛生」がどのような理想を持ち、どのように建物内で実現されたかはわからない



挿図11 大日本私立衛生会 被害状況

が、まだ日本では十分に浸透していない建築における「衛生」の知識を、レツルが持っていた可能性は高い。そして「衛生」の啓蒙活動を父から継承し、必ずしも健康ではなかったらしい称吉にとつて、「衛生」観念の徹底した自邸は大日本私立衛生会同様に必要であつたと思われる。⁽⁵⁰⁾

大日本私立衛生会の建物は、大正十二年の関東大震災で焼失した(挿図11)。⁽⁵⁰⁾ 大日本私立衛生会と長與邸はいずれも既に存在せず、現在確認できる記録のみではその立証は困難である。しかし、大日本私立衛生会は当時の理想的な会堂として審事委員も納得できる建造物であつたと考えられる。長與邸もまた九年に及ぶ長い年月をドイツで過ごした称吉の理想を外観だけではなく、「衛生」観念という面でも反映させた建物であつたのではなからうか。

(五) 東京勸業展覧会建築図案展覧会と長與邸の評価

長與邸は雑誌『建築世界』にも紹介される当時話題の建物であつた。加えて長與邸を世に知らしめたのは東京勸業展覧会であつたと考えられる。

明治四十四年三月二十日から五月二十日に上野・東京勸業陳列館において開催された東京勸業展覧会では建築図案展覧会が初開催された。建築図案の展覧会はそれ以前から開催が期待されており、黒田鵬心によれば「可なり世人の注意を惹いたという」⁽⁵³⁾。東京勸業展覧会の出品点数等は明らかではないが、建築図案展覧会(以下、「同展」と記す)には辰野葛西建築事務所による「中央停車場」の図面をはじめ百点あまりの作品が出品された。同展については新聞や雑誌に展覧会評が掲載され、⁽⁵⁵⁾ 同展への出品図面六十点を掲載する『東京勸業展覧会出品建築図案集』が発行された。⁽⁵⁶⁾

同展にレツルエンドホラ合資会社は「外人墓地(配景図)・「聖心女学院

建築図」・「長與男爵邸配景図」「聖心女学院正門配景」・「大日本私立衛生会建築」・「商店建築正面建図」を出品した。⁽⁵⁷⁾『朝日新聞』では、「私立衛生会(レッツル、エンド、ホラ)、聖心女学院(同上)」を主要作品としてとりあげ、また黒田も展覧会評で「外人墓地」「商店」「聖心女学院」「長與男爵邸」に触れている。⁽⁵⁸⁾『建築世界』五巻五号では某工学博士談として以下の通り記している。⁽⁵⁹⁾

一般の日本人が未だ建築模型とか図面とか云ふ者に全く興味を持つて居ないのは甚だ遺憾な事であるが、然し之は建築学者の不勉強なる罪にも帰する事であつて今後は受けなくとも宜いから、盛に此種の展覧会を開いて素人に分る様な批評をドシ／＼遣るが宜い。偕今回の東京府勧業展覧会建築部は未だ初て、ある為か、其出品数は極めて少ないが其割合に佳い物が沢山集つて居るので、先づ大体に於て成功したと言て宜からう、最も人目を注目する者は辰野、葛西両氏の設計に成れる中央停車場の建築図であらう。(中略)次に住宅の方に於て最も人の注意を惹く者は、葛野氏の図案に係る夏の家と、レッツル、エンド、ホラ事務所設計の長與男爵邸である。後者は配景外観の美を主とし、前者の夏の家は実用を主として然かも巧に自然色の美を之に調和せしめたもので、何れも上乘の作だと見受けた。⁽⁶⁰⁾

長與邸は同展以外の場所でも採り上げられた。明治四十四年五月二十五日の『日本』土木建築号では長與邸について「能く博士の趣味に叶ひ、外観は瀟洒たるものだが内部には莊重の裝飾が施してある上流邸宅の精粹を發揮したものと云ふ評判がある」と記す。⁽⁶¹⁾

長與善郎は長與邸に志賀直哉・柳宗悦・群虎彦・三浦直介が見物にきたことを記す。

レッツェルというドイツ人の建築家の設計に、あれこれ自分の趣味を注文して加え、新築成つたばかりの洋館の二階の白一色の広い書齋に、或る日、その『白樺』同人の志賀直哉、柳宗悦、群虎彦、三浦直介の四人がやって来た。一階は磨かない堅い石を材料としたドイツ風様式で、日本では初めての珍しい建築を見ようとしてであつた(中略)。面白げに洋館の方だけを見物し、くつろいだ。⁽⁶²⁾

長與善郎の記す「日本では初めての珍しい建築」が具体的に長與邸のどの部分を指すのかはわからないが、白樺派の四人が訪れるような話題性があつたと思われる。

(六) 第一次世界大戦とレッツル

本章の最後にレッツルの活動停止について触れておきたい。レッツルは大正四年暮れに事務所を閉鎖、同六年に建築家としての活動を停止した。外国人居留地比較研究グループはレッツルが敵国人のリストに掲載され、以降敵国人として監視下にあつたのを、同八年来日し、チェコスロバキア仮政府の臨時代理公使となつたヴァン・セスラーヴ・ネメツク大尉が同年十二月三十日の書簡でレッツル他三名の監視を免除し、オーストリア旅券の代わりにチェコスロバキア人としての仮旅券を承認するよう要請したことを指摘している。⁽⁶³⁾

近年、諸橋英一は第一次大戦下の日本の対敵取引禁止政策で、敵国企業との取引及び敵国民と契約を結ぶことができなくなったことを指摘している。⁽⁶⁴⁾大正三年八月二十六日オーストリア＝ハンガリー帝国は日本に宣戦布告し、八月二十七日には日本大使はウィーンを退去、国交は断絶した。同四年末、英国はThe Trading with the Enemy (Extension of Powers) Act

1915（「対敵取引法」）により敵性の判断を国籍によって判断する国籍主義に変更し、更に翌年二月二十九日と四月二十六日に発せられた「The Trading with the Enemy (Statutory List Proclamation 1816) に基づき」、敵国と関係のある人・企業をブラックリストに掲載、取引を禁じたという。「このリストには在日独逸商人・企業だけでなく敵国企業と関係ありとみなされた日本人も掲載され」、「英国政府は日本に対して協力を要請し、日本政府もその趣旨を認め」指導を行ったという。

レツルの事務所が閉鎖されたのはこの理由であろう。最終的に同六年日本政府も「対取引禁止令」（勅令第四十一号）を公布し、敵国籍またはブラックリストに記載された人や企業との取引は禁じられた。レツルは日本で活動出来なくなったと考えられる。東郷茂彦は同三年のデ・ランデの死因を日独両国の対立に悩み心労が重なったとするが、⁽⁶⁵⁾レツルはさらに厳しいこの勅令に阻まれたと考えられる。レツルが事務所を閉鎖し建築活動が休止するのはレツルの個人的な理由や不況によるものではなく、敵国人として契約締結が不可能となり、建築活動が続けることが出来なかったと思われる。レツルが商務官となったのは日本語が堪能で商務官として適任であるという理由よりも、チェコスロバキア人として公的に動ける身分を保証するためのネメツクの配慮であった可能性を指摘したい。

レツルは再来日して関東大震災に遭遇した。この二度の悲劇にあたらないければ、日本にはもう少し多くのレツルの建造物が残っていたと思われる。

二 尾張徳川家麻布富士見町邸

（一）長與邸選定

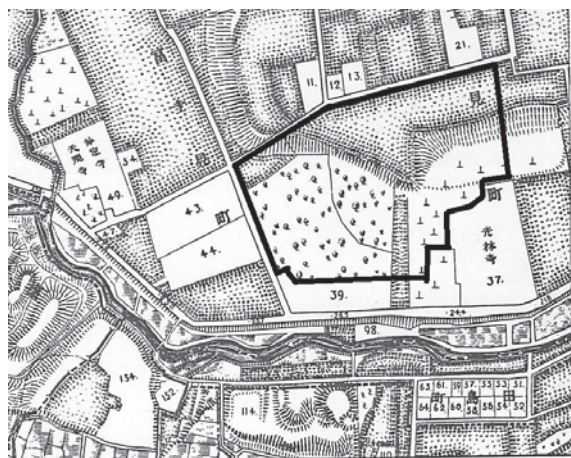
麻布富士見町への転居前、徳川義親・米子夫妻は小石川水道端邸（小石川区小日向水道町二丁目四十二番地）に暮らしていた。⁽⁶⁶⁾小石川水道端邸は十四代・十七代尾張家当主慶勝の右腕ともいわれ、文部大輔を務めたことでも知られる子爵田中不二磨（一八四五―一九〇九）が所有していた「双芝仙館」という純和風の建物で、敷地は二六八一坪、建物は一八三坪であった。⁽⁶⁷⁾十八代当主義禮が明治二十六年（一八九三）に名古屋に暮らすことを選択して以降、大正九年（一九二〇）七月末日まで尾張家本邸は名古屋・大曾根にあった。⁽⁶⁸⁾義禮が名古屋に移転した後も、慶勝夫人矩子（一八三二―一九〇二）と義禮の一人娘米子が浅草瓦町邸に暮らしていたが、同三十五年十月二日に矩子が逝去した後、浅草邸敷地は全て貸地となり、東京に邸宅を残さなかった。⁽⁶⁹⁾義親が同四十一年に第十八代義禮と養子縁組し、義禮逝去に伴い当主となり襲爵しても東京に邸宅がなかったため、市谷仲之町御学問所が用意された。翌年米子と結婚、新居として尾張家の御相談人長であった田中不二磨の邸宅を使用したのである。建物は完全な日本家屋で子育てに向かず狭であったと義親夫人米子は回想している。⁽⁷⁰⁾

ではなぜ麻布富士見町の長與邸への転居が決まったのであろうか。まず麻布富士見町の土地がどのような経歴を持つのか確認してみたい。

麻布富士見町の敷地周辺は、文久年間（一八六一―四）にはいくつもの区画に分割された武家地であった。出羽国新庄藩戸沢上総介下屋敷、摂津国麻田藩青木美濃守下屋敷のほか六戸ほどに区画されている。⁽⁷¹⁾明治維新以降

家禄を失った武家地の多くは畑となり、この地域も明治九年には畑となり、同二十年には木々の生える緑地となっていた(挿図12)。長與邸の敷地も宅地は全敷地の約三十六パーセントにあたる二二五坪一九合のみであり、一町三反一畝四歩が山林であった。また尾張家は長與邸隣接地を購入するが、その内の一つも地目は畑と山林であり、地図通りこのあたりは緑地となっていたと考えられる。しかし同三十年頃からこの周囲には人が多く居住するようになった。⁽⁷⁵⁾

では尾張家ではどのように長與邸を選んだのであろうか。明治四十四年十二月二十六日の尾張家御相談人会に東京別邸選定の議案が出てくる。同日午後三時から小石川水道端邸で開催された御相談会には当主義親と御相談人である加藤高明(一八六〇―一九二六)・永井久一郎(一八五二



挿図12 麻布富士見町邸周辺(明治20年代)
(太線―後の麻布富士見町邸敷地)

一九二三)・成瀬正雄(一八六九―一九四七)・堀鉦之丞(生歿年不明)、そして家令の海部昂蔵(一八五〇―一九二七)、家職の桜井武愷(一八六四―歿年不明)・五味末吉(生歿年不明)が出席した。

一、東京御別邸地ノ撰定ニ関スル件(未成案)

右ハ各方面に涉り土地代拾万円(建物ヲ除キ)位ノ所ヲ差当リ目的トシテ撰択スルコトニ仮定⁽⁷⁶⁾

この日議論は午後十一時まで続けられたとあるが、これ以上当日の記録はなく、東京別邸選定の件は他の記録を見つけることが出来ていない。翌年四月に購入に至ったことを考えると、この日からあまり時間を置かず長與邸購入の話があり、急遽決定したものと思われる。

御相談人会の出席者として永井久一郎の名がある。永井は衛生局御用掛を務め、一八八四年ロンドンの万国衛生博覧会に日本代表として視察したことで知られており、大日本私立衛生会でも設立時から幹事を務めた⁽⁷⁷⁾。明治十三年に永井が内務省衛生局統計課長に就任した際には、長與専斎が衛生局長を務めており、永井の著書『衛生二大工事…巡欧記実』には専斎が序文を寄せている⁽⁷⁸⁾。同時に永井は矩子の信頼を受け、矩子の歿後米子の養育を任されていた⁽⁷⁹⁾。

明治四十四年十二月の御相談人会の時点で永井が長與邸を候補の一つとして既に把握していたか否かは不明である。しかし長與邸売却の知らせは永井の耳にいち早く入ったであろう。大日本私立衛生会の幹事でもある永井にとって、称吉は長らく仕事を共にしてきた専斎の息子であり、その早すぎる逝去と邸宅の売却には心が痛んだと考えられる。

義親はこの時点で未だ学生であり大学のある東京を離れることは出来なかった。当分東京での生活が続くと考えられる中で、本邸を名古屋に置く

か東京に移すかという議論もあったと考えられ、本邸としても機能できる広さや侯爵家本邸としての建物の風格も考慮されたであろう。麻布には同二十九年有栖川宮家の御用地が置かれ、同四十四年に天現寺に市電が開通した。多くの華族が移り住み、同年義親の実兄である松平慶民（二八八二―一九四八）も麻布富士見町邸近くのトーマス・グラバー（二八三八―一九二一）邸を購入した。そして義親には同年五月二十二日に長男五郎太（後の尾張家二十代当主義知）が生まれ、翌年九月に次郎太（一九二一―二三）となる次子の誕生が予定されていた。育児のための衛生的な環境も重要な選定基準の一つであったと考えられる。

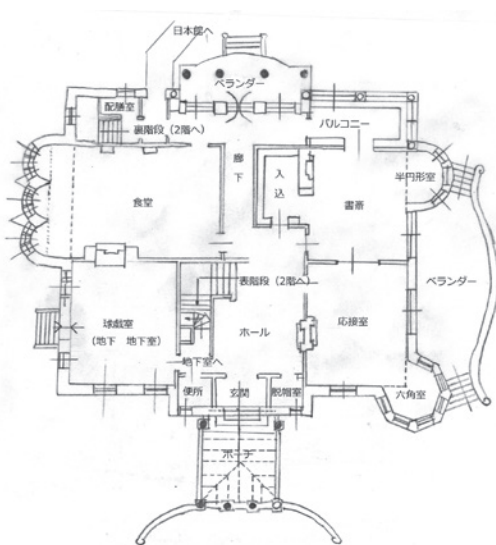
同四十五年三月二十二日付の「土地建物売買契約書」によれば、麻布区富士見町三十三番地三号をはじめとする四筆とその土地に存在する建物、樹木等一切が尾張家に十八万円で売却された。⁽⁷⁷⁾ 予算内であり尾張家の希望する条件を満たしたこと、そして医学に貴重な貢献をした長與家を救済する目的もあり、この長與邸が選ばれたと考える。

（二） 前半期の邸内

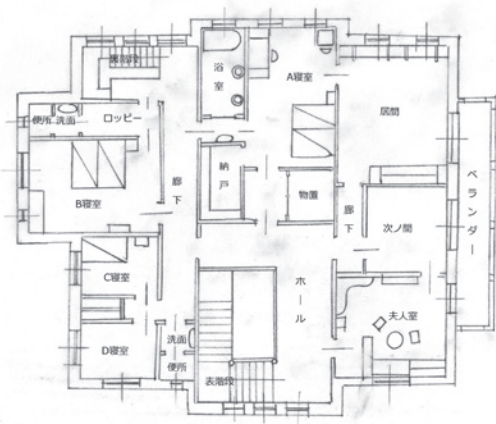
尾張家は明治四十五年四月十五日に長與邸を購入後、入居前に隣地を購入⁽⁷⁸⁾、義親の同級生である渡辺仁（一八八七―一九七三）の設計・施工により大幅な増改築を行った。敷地総面積は七七三坪七合三勺八才となり、大正四年十月には建物は主屋以外に二十棟が確認される。長與邸内の建物、尾張家で増築した建物を表1（文末に掲載）にまとめた。以下、本文で建物に続いて記す括弧内の算用数字は表1の建物番号であり、「麻布富士見町邸敷地配置図（大正四年十月）」⁽⁷⁹⁾及び「麻布富士見町邸敷地配置図」（昭和二年十二月）⁽⁸⁰⁾の図面内の番号に対応している。

主屋として、長與邸から引き継がれたレッセル設計の本館（1）と日本館の一部に、「御後室様御間」（41）、「御子様御間」（42）、「事務所はじめ」（43）、「女中部屋はじめ」（44）が増築された。本館については渡辺仁による平面図が残されている（挿図13）。本館一階は賄室がなくなり、球戯室となった。後に義親が建てる目白邸にも撞球室があることから、ビリヤード台が置かれたと思われる。台所は「女中部屋はじめ」に新設されたため本館内にはなくなり、書院への渡り廊下の接続部分に配膳室が設けられた。本館一階のホール・応接室・書斎・食堂の構成は長與邸からそのまま引き継がれるが、書斎東側は壁で隔ててバルコニーとなり、その脇の温室はベランダへと改装され庭に出られるようになった。売買契約書二項に「売買目的建物物ノ内西洋館ニハ椅子、テーブル、窓掛、敷物、書棚ノ類」は一切付属のまま引き渡すこととなっていることから、家具はそのまま使用されたと思われる。⁽⁷⁹⁾ 本館二階は長與邸では全室畳敷きであったがすべて洋室に改装された。南側は西から夫人室・次の間・居間となり、義親夫人米子が過ごしたと思われる。長與邸でも寝室として使われていた建物中央東側に寝室Aがあり、浴室や大きな納戸を備えることからメインベッドルームと思われる。北側に寝室が三室（B・C・D）があるが、これらがどのように使用されていたかはわからない。長男義知のみが義親と米子と共に本館に生活していたが、どの部屋を使用していたか判明しない。⁽⁸⁰⁾ また新たに屋根裏に三階が設けられ、六つの寝室（内、二室は物置の書込あり）が設けられた。三階の採光のため屋根に横長のドーマーが設けられたものこの時と考えられる。三階には寄留人たちが過ごした。

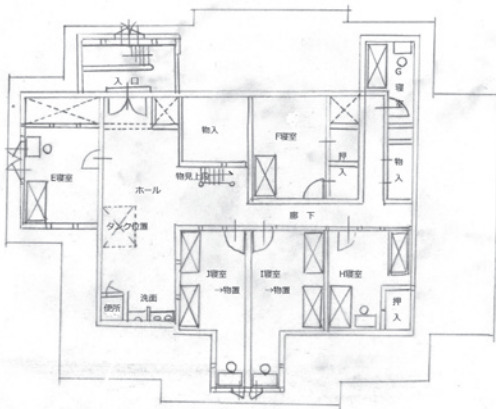
書院と四つの増築部分からなる日本館については現在まで伝えられた図面と聞き取り調査資料から部屋構成の復元を試みた（挿図14）。⁽⁸¹⁾ 長與家から



13-1 一階



13-2 二階



13-3 三階

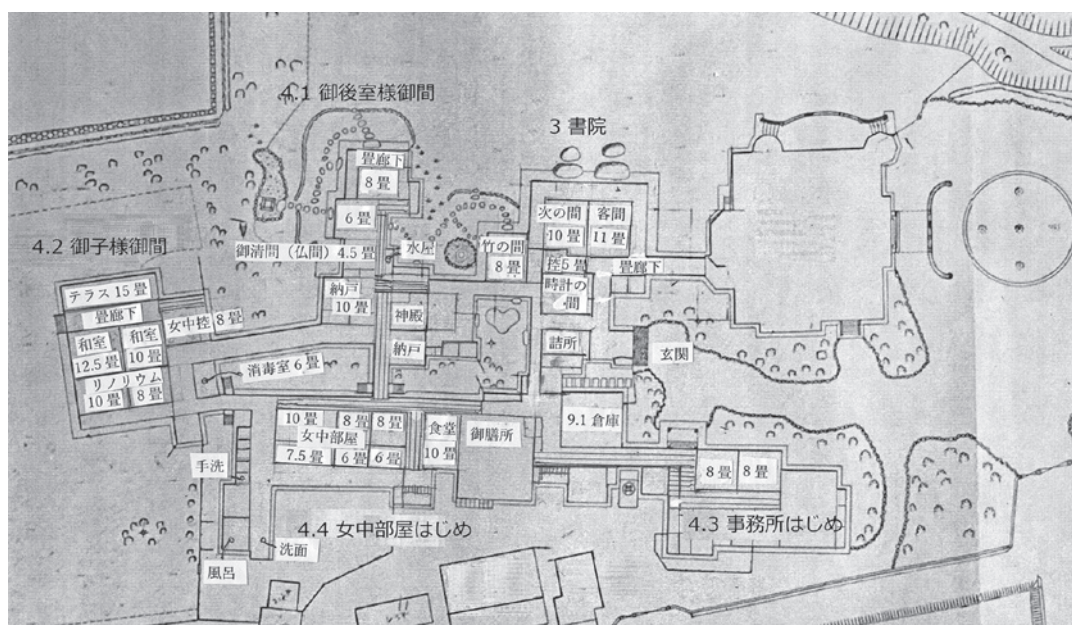
挿図13 麻布富士見町邸 本館 平面図

譲られた日本館一四六坪九五合の内、玄関から書院(3)にかけての一部が残された。日本館の表玄関は本館北側にあった。玄関から上がって右が時計の間、左が詰所である。「時計の間」には大きな時計が設置され、詰所には馭者・馬丁・車夫などが詰めていた。書院は十一畳の客間・十畳の次の間・五畳の控がある。窓際は全て畳廊下である。書院脇の部屋は「竹の間」と呼ばれ、長男義知以外の義親の子女、長女絹子・次女春子・三男義龍・三女百合子が普段の食事に使っていたという。

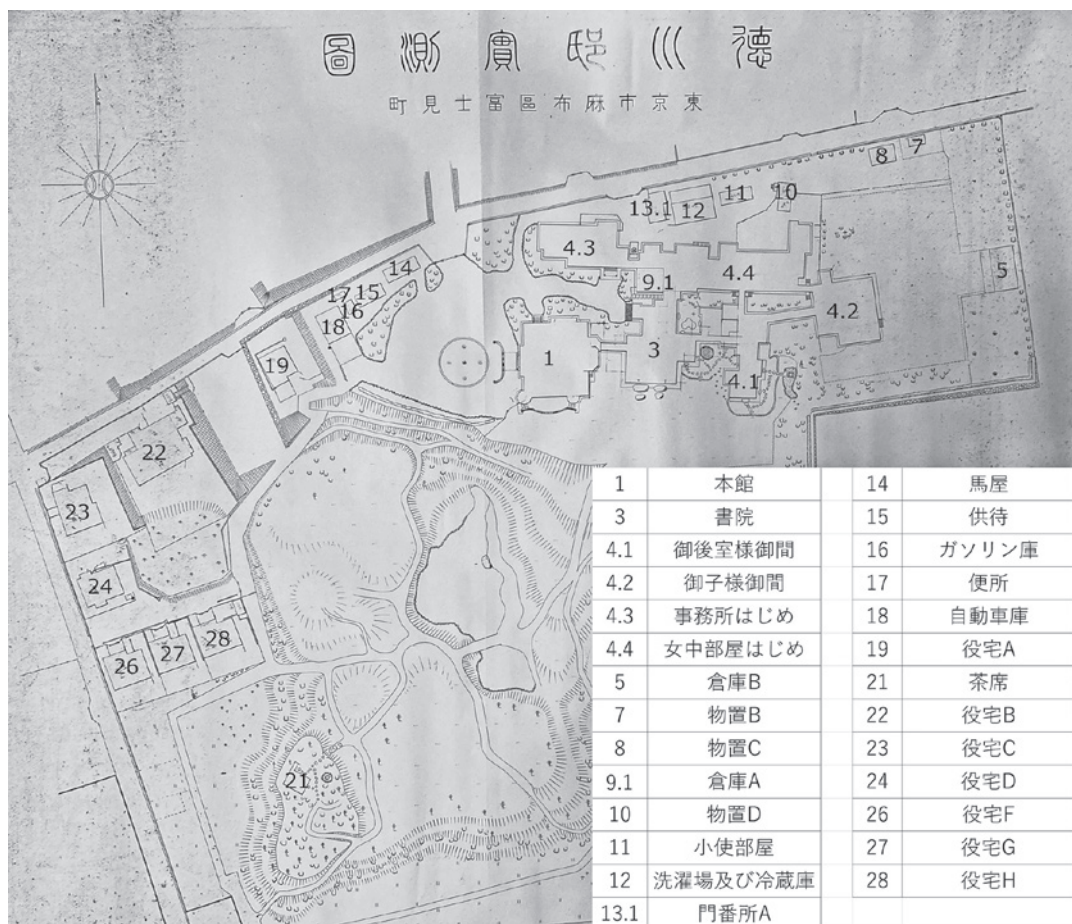
書院東側は「御後室様御間」(4.1 木造瓦葺平家 一五坪五合)こと十八代義禮夫人良子(かたこ)二八六九(一九二四)の部屋である。八畳と六畳そして御清間(仏間)の四・五畳、菊印様(良子)納戸十畳が南から北に並んでいる。その東側に離れて建てられたのが「御子様御間」(4.2 木造瓦葺平家 五六坪一五六合)であり、絹子・春子・義龍・百合子の四人が育った。南側は十二畳半

と十畳の日本間、北側はリノリウム敷きの十畳と八畳である。リノリウム敷きの部屋に四人はベッドで寝ていたという。脇の八畳には子ども付の女中が控え、廊下の脇の六畳は消毒室と呼ばれる板間で、風邪をひいたときにそこに隔離された他、米子の出産に使用されたという。「御子様御間」から北側の通路を抜け右側に廊下を進んだ先には大きな檜風呂があった。幼い時分は女中用の別の浴室が使われ、ここは使わせてもらえなかったと絹子たちは回想している。

北側は家職と女中のスペースである。東側が「女中部屋はじめ」(4.4 木造瓦葺平家 六三坪七合)であり、十畳・八畳・七・五畳・六畳・八畳・六畳の六室が設けられている。その脇に食堂と御膳所があるが、義親夫妻と義知は洋館で、絹子たちは竹の間で食事をしており、御膳所よりも東に位置することから家職が入ると思えず、女中の食事に使われたと考えられ



挿図14 麻布富士見町邸 日本館 平面図



挿図15 麻布富士見町邸 敷地配置図(大正4年10月)

る。御膳所の廊下が板の間に代わるところが「奥」と「表」を分ける「御錠口」と推測する。西側は「事務所はじめ」(43 木造瓦葺二階家六〇坪、二階一三坪七五合)であり一階は役所(事務所)、二階には当直室などがある。役所には庶務課の三人と会計課の四人が控えていた。⁽⁸³⁾「事務所はじめ」の各部屋はどのように使われていたかわからない。大正三年に徳川生物学研究室、同十二年に林政史研究室がこの麻布富士見邸内に創設されたが、別の建物等が増築された記録がないことから、区画内の部屋が使用された可能性が高い。⁽⁸⁴⁾御膳所と事務所の間には長與家由来の煉瓦造り二階建ての倉庫A(91 各階八坪七五)があり、室内で接続していた。

日本館は玄関が四か所ある。表玄関の脇に事務所の玄関があり、他に北面御膳所の西側に「表」の通用口が、食堂と女中部屋の間に「奥」の通用口があった。

「麻布富士見町邸敷地配置図(大正四年十月)」(挿図15)にみられる建物の内、長與邸からの継続使用は物置B(7)・洗濯場(12)・門番所A(13)・便所(17)と推定される。また古河はつより購入した隣地内の建物の内の一棟が役宅B(22)として使用された。増築されたのは自動車庫(18)・倉庫B(5)、役宅A・C・F・Hの五戸(19、23、26・28)である。水道端邸から役宅D(24)が移築された。ガソリン庫(16)の新設の記録はないが自動車置場に付随してこの時につくられたと思われる。洗濯場(12)には湯沸と冷蔵庫が加わった。馬屋(14)・供待(15)は長與家由来か新設か記録がない。

敷地の北側、青木坂から直進する道に正門と通用門がある。門番所の位置から普段は通用門のみ開門していたかと推測される。庭は道が整備され、大正三年十二月、坂下南西の高台となったところに、茶席(21)が設けられた。この茶席は現在、徳川美術館の心空庵となっており、別途第四章

で紹介する。また同七年二月には神殿一棟が新設された記録がある。⁽⁸⁵⁾神殿には明治七年五月以降先祖の御霊が神道により奉祀されていた。義親の子女は毎朝「神殿」と「仏間」の両方をお参りすることを日課としており、⁽⁸⁷⁾今回は絹子手書きの図面と発言に基づき日本館内の「神殿」を記したが、同六年に新設され同十二年四月に廃止された「神殿」については建設場所も坪数も判明しない。

(三) 後半期の邸内

大正十二年九月一日、関東大震災が起きた。麻布富士見町邸にいた良子と絹子以下の四兄弟は前日に鎌倉の別荘から帰宅していたが、麻布富士見町邸に暮らす家職や女中・家職の家族ともども無事であった。⁽⁸⁸⁾義親と米子は北海道より帰京途中、青森で知らせを聞き、米子は仙台に留まり、義親は三日午前一時頃無事に帰京、米子は仙台から北海道八雲に戻った。⁽⁸⁹⁾義知は市谷仲之町御学問所で無事であった。⁽⁹⁰⁾

本邸内に倒壊した建物はなく、日本館は瓦が落ちたくらいであったが、煉瓦造りの倉庫は「半潰同様」、義親夫妻の暮らす本館は内部に損傷が大きく大修繕が必要となった。石塀は道に面した部分は多少の破損で済んだが、隣地に接した部分は大部分が崩れ落ちた。旧家職や旧女中、出入りしていた関係者の内、家を失い行先に困っているものに役宅、供待等の場所を一時的に貸した。⁽⁹¹⁾

尾張家には麻布富士見町邸新館と記された大正十年の図面が残されているが未工となっている。⁽⁹²⁾絹子によれば関東大震災の時、既に本館は工事を進めていたというが、その工事については記録がない。

大正十五年から昭和二年にかけて大幅な増改築が行われた。「麻布富士

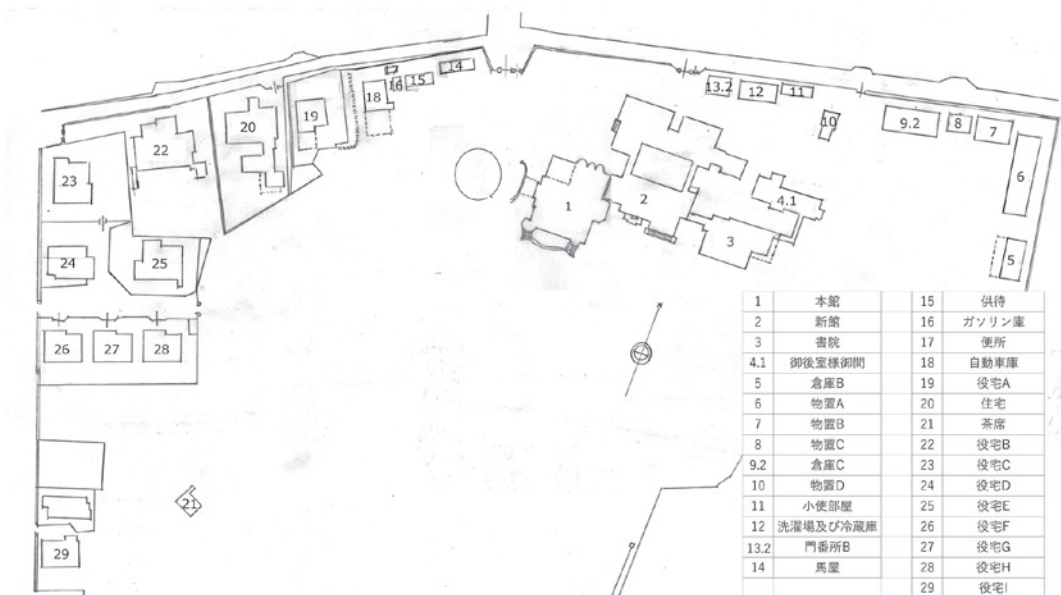
見町邸敷地配置図(昭和二年十二月)(挿図16)の通り、建物は二十九棟に増加し、主屋はレツルの本館(1)、この時新設された渡辺仁設計による新館(2)、書院(3)、御後室様御間(4.1)の四つとなった。⁽⁹³⁾

この工事はまず本館内の改修工事から開始したと推定される。⁽⁹⁴⁾ 本館三階の建坪の記載がなくなることから三階はなくなったと思われる。一階の間取りは昭和六年の邸内写真を確認する限りでは変化が認められず、二階は新館と接続したことが新館の図面からわかるが、間取りは判明しない。本館脇に御膳所が仮設され、書院、「御後室様御間」ともう一か所の不明部分が新築のない場所に仮移築され、新館が建設された。新館建設後、「御子様御間」「女中部屋はじめ」は取り壊され、「事務所はじめ」は助愛社に寄付された。

本館の東側に建てられた新館(挿図18)は昭和三年『国際建築』誌上に渡辺仁設計として紹介され、⁽⁹⁵⁾ 平面図(挿図19)と写真が掲載される。新館南側一階には書斎・談話室・食堂とベランダがある。新館二階南側に絹子・春子・百合子が暮らし、⁽⁹⁶⁾ 米子の過ごす本館二階と接続した。噴水のある中庭をはさんで(挿図20)、北側の建物の西半分が「表」であり事務所と事務所の来客用の応接室・家職の食堂があり、東半分は「奥」として台所と女中食堂等があり、御錠口で区切られている。新館の東に書院があり(挿図21)、その先に御後室様御間が続いていた。

通用門の東側には倉庫と物置が計六棟、建物番号5・10・小使部屋(11)・洗濯場(12)・門番所B(13)がある。門の西側には馬屋(14)・供待(15)・ガソリン庫(16)・便所(17)・自動車庫(18)がある。門番所Aは関東大震災の余震で倒壊したため新たに木骨鉄筋コンクリートで門番所Bが作られ、また半潰した倉庫Aの代わりに敷地東側に木骨鉄筋コンクリートで三階

尾張徳川家麻布富士見町邸(上)



挿図16 麻布富士見町邸 敷地配置図(昭和2年12月)



17-4 書斎



17-1 ホール



17-5 食堂



17-2 応接

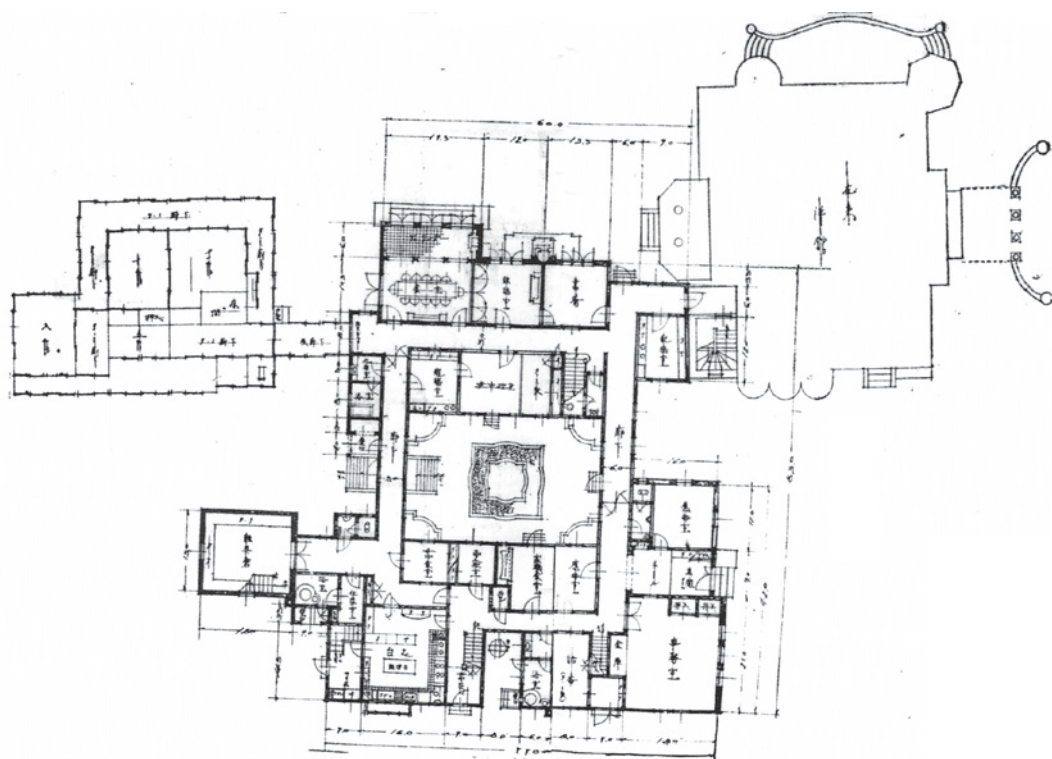


挿図18 麻布富士見町邸 本館及び新館

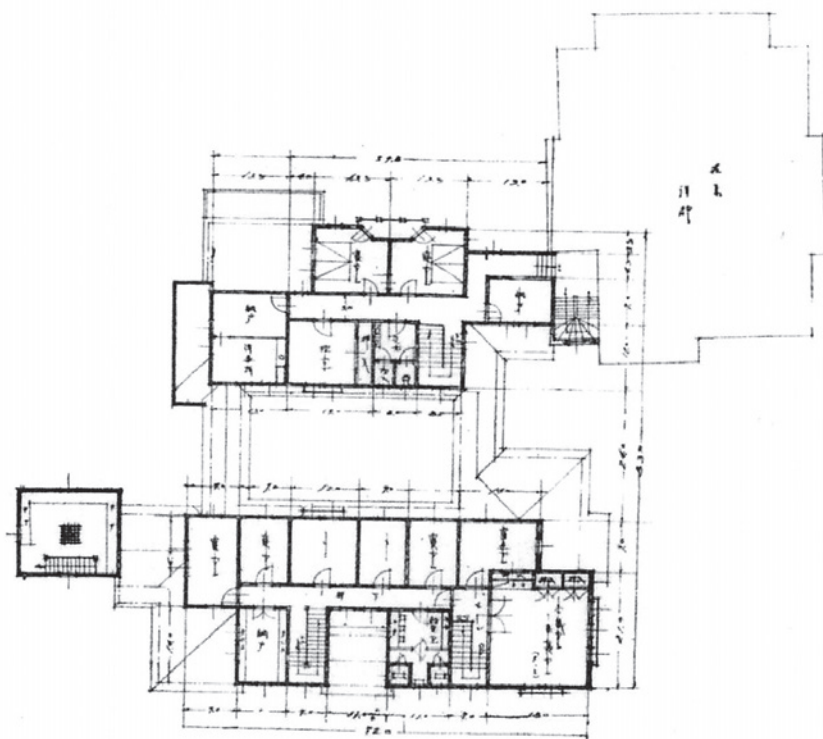


17-3 応接

挿図17 麻布富士見町邸 本館 内観



19-1 一階



19-2 二階

挿図19 麻布富士見町邸 新館 平面図

建の倉庫C⁽⁹²⁾が作られた。また木造トタン張の物置A⁽⁶⁾も一棟新設された。役宅もA・Iの九棟(19、22・29)に増加し、「住宅」⁽²⁰⁾と記された建物は外側に門があることから、貸家とされていた一軒に該当すると思われる。

絹子たちによれば、レツルの建物とよく調和した正門の門扉もこの時に作られたものという(挿図1)。庭は石川全により整備され、池泉が設けられていた(挿図22)。また馬場、テニスコートも設けられた⁽⁹⁷⁾。

渡辺仁は新館について「東西に長い二棟の二階屋を二つの渡廊下でつないだといふだけですが、採光通風がい、事、火災にも比較的安全な事、暖房の臭が居室へもれないといふ事等がい、と思ひます、又中庭もこれだけあるとかなり利用が出来ます」と記している⁽⁹⁸⁾。本館は新館とつなぐことにより二階の避難経路を確保し、耐震も配慮して作り直されたと考えられる。ペランダの写真にはスチームが写っており(挿図23)、全館暖房が実現していたのかもしれない。関東大震災の被害は修復され、昭和二年には完全に暮らすことのできる環境が整ったと考えられる。

(四) 麻布富士見町邸からの転居

増改築が終了した時点で尾張家は麻布富士見町邸からの転居は考えていなかったであろう。しかし尾張家は昭和四年初めにはこの邸宅のフランス大使館への譲渡を決めた。麻布富士見町邸を去った理由は尾張家では義親夫人米子が斜面下にある工場からの視線を嫌ったためと伝えられている。それは米子らしい表現で転居の理由を表現したものであり、事実でもあらうがその理由だけではなかったであろう⁽⁹⁹⁾。

青木信夫は東京における華族の邸宅分布を比較し、明治初期には下町に

あった華族の邸宅が明治四十年代には激減し、麻布・赤坂・四谷・牛込・小石川・本郷などの邸宅が二倍から五倍に増加したという⁽¹⁰⁰⁾。しかし華族はそのまま残ることなく、郊外に出ていくことを青木は統計的に示し、「経済的問題という内的必然性を回転軸に、関東大震災や市民の批判といった外的要因を契機とした郊外化の動き」であると捉える。尾張家はまさにこの指摘に添うかのように、東京での生活を浅草で開始し、小石川邸を経て麻布邸へと移動してきた。麻布区に居住する華族は同四十四年に七十家に及んだ⁽¹⁰¹⁾。しかし昭和金融恐慌で多くの華族が負債を抱え、郊外に出ていくことも考える中、尾張家もまた財団設立を見据え、資金の捻出等を考慮した上で、尾張家家政の合理化・簡素化を進め、麻布富士見町から転出することを決めたと考えられる⁽¹⁰²⁾。邸宅の処分と同時に人員削減が行われた。麻布富士見町邸を退居し目白邸に移転する前に、義親は長女絹子・次女春子の婚嫁先、三男義龍の養子縁組先を決め、家職と女中も削減した。使用人だけではなく家族まで人員削減を行ったのである。

麻布富士見町邸を退去する直前の昭和六年二月七日記念撮影が行われた(挿図24)。この写真にはペランダ前に男性二十九人と子ども六人・犬一匹、ペランダに女性二十八人の計六十三名が写っている。中央付近に義親・米子・義知・絹子・春子・義龍・百合子・家令鈴木信吉の姿があり、その周囲は家職・女中、そして家職の家族や寄留人も加わっているようである。

尾張家は二月十三日から借家である麻布桜田町の後藤新平邸への引越作業を開始し、最終的に十八日に麻布富士見町邸を去った。

(続く)



挿図21 麻布富士見町邸 書院



挿図20 麻布富士見町邸 新館 中庭



挿図22 麻布富士見町邸 池泉より主屋を見上げる



挿図23 麻布富士見町邸 新館 内観



挿図24 麻布富士見町邸 集合写真

註

- (1) レッルがカル・ホラとの協同経営により設立した会社名は、英語では「Tears & Hara Architecture & Engineering Offices」とあるが、日本語表記は一定しておらず、「レッル、エンド、ホラ合資会社工業事務所」「レッル、エンド、ホラ工業事務所」「レッル、エンド、ホラ合資会社工業事務所」「レッル、エンド、ホラ工業事務所」等がある。ここでは「レッルエンドホラ合資会社」と表記することとする。
- (2) 称吉は夫人延子(後藤象二郎五女)との間に一男二女がある(平成新修旧華族家系大成「霞会館、一九九六年」)。
- (3) 大川三男は「国際建築」(四一、美術出版社、一九二八年)の麻布富士見町邸の記事に触れたうえで、「この麻布の邸宅の存在は謎である」とする(大川三男「渡辺仁 歴史主義の成熟とモダニズム」丸山雅子監修『日本近代建築家列伝 生き続ける建築』鹿島出版会、二〇一七年)。
- (4) 板倉聖宣監修『事典日本の科学者―科学技術を築いた五〇〇〇人』(日外アソシエーツ株式会社、二〇一四年)。
- (5) 『大日本私立衛生会雑誌』(三二九、大日本私立衛生会、一九一〇年)。
『日本医事新報臨時増刊 近代名医一タ一話』一、日本医事新報社、一九三七年。
(5) 明治三十一年勅令第三四四号。学位令第二条の規定に基づき、明治三十五年十一月十七日に医学博士の学位を授かったことが官報に記録されている(「官報」五八一一、一九〇二年十一月十八日)。
- (6) 門人の湯川玄洋は「明治四十二年冬、男は不幸にして肋膜炎の犯す処となり(中略)相州片瀬の別業に伏して、煙霞の間に静養する事一年、翌四十三年八月に至って鑲金の暑気は衰弱せる男の病軀を耐へしむるに能はず(湯川玄洋「長興博士の卒去」『医海時報』八四七、医海時報社、一九一〇年)とする。また「長興男爵卒去」(熊本県医師会学術部編『鎮西医報』一三一、鎮西医報社、一九一〇年)では「二月下旬片瀬ノ別邸ニ逗留中ニ始マリ先ツ腹膜炎ヲ発シ爾来東京ニ帰リ麻布の新邸ニ加療中ナリシガ(後略)」とする。
- (7) 「明治四十三年八月二十五日 依父専齋勲功特授男爵 医学博士 長興称吉」(「官報」八一五五、一九一〇年八月二十六日)。「明治四十三年八月二十六日 叙従五位 医学博士男爵 長興称吉」(「官報」八一五六、一九一〇年八月二十七日)。
- (8) 前掲註(4)。
『官報』八一六六、一九一〇年九月八日。
湯川玄洋「長興博士の卒去」(『医海時報』八四七、医海時報社、一九一〇年)。
「長興男爵の葬儀」(『医海時報』八四八、医海時報社、一九一〇年)。
「長興男爵の卒去」(『鎮西医報』一三一、鎮西医報社、一九一〇年)。
「長興男爵卒去」(『治療薬報』六四、治療薬報社、一九一〇年)。
- (9) 「新邸は地所共に十数万金を要したもので、独逸人レッツチエルなるものを特に技師として聘して其洋館の如き全然羅馬式である。今秋十一月頃には落成するさうである」(『医海時報』八四六、医海時報社、一九一〇年)。「長興男爵の危篤(中略)爾来二十五万円を投じて新築せし麻布富士見町の新邸に移り(中略)新邸は敷地八千余坪日本式と独逸式の折衷にて書斎は全て独逸式を採れり又庭園には三棟の温室あり六月中英園サイカ会社より五千円を投じて購求したる五百余种の蘭を培養し居れども男爵は未だ一回も之を見してとなしといへり以て男爵の嗜好の読書と園芸にあることを窺ひ得べし」(『朝日新聞』一九一〇年九月二日朝刊)。「博士の嗜好は主として読書にあれども性来虚弱なるより土曜日曜には必ず相州片瀬の別墅に赴き多くの園芸物を友として静養するを常とし富士見町の新邸にも珍奇の植物を多く蒐集したるが終に之を一見だにせずして逝せしは遺憾なり」(『朝日新聞』一九一〇年九月七日朝刊)。「富士見町の新邸、工を竣るに及び、特に数千金を投じて英国より数百種の蘭を購入し温室中に栽培せしめられたりと聞く」(菅稲吉「長興先生を憶ふ」『医海時報』八五〇、医海時報社、一九一〇年)。
- (10) 「長興博士の事共」(『医海時報』八四六、医海時報社、一九一〇年)。
- (11) 長興立吉の長女孝子に平成十八年前後にお伺いしたところでは、残念ながらこの邸宅に関する資料等は伝来せず、立吉が成人前に処分したため敷地購入の経緯なども聞いていないとのことである。
- (12) 長興善郎「わが心の遍歴」(筑摩書房、一九六三年)。また明治四十三年十二月二十一日には長興邸に泥棒が侵入しており、そのような事件が契機となった可能性もある(『朝日新聞』一九一〇年十二月二十四日朝刊)。

(13) 鈴木博之・初田亨編『図面でみる都市建築の明治(柏書房、一九九〇年)』。

(14) Stanislav Bohadlo, "Jan Letzel: Japonsko - zeme, kterou jsem hledal", GATE Nachod, 2000.

(15) 菊楽忍「ヤンレット再考―書簡集から建築活動をたどる」(『広島市公文書館紀要』二五、二〇一二年)。

(16) 『建築雑誌』二八二(日本建築学会、一九一〇年)には「近年新築の邸宅」として「自分が関係し又は記憶し居るものは目白台の田中子、麻布今井町の三井八郎次郎男、高輪の浅野総一郎氏、番町の高橋是清男、本郷切通しの岩崎男、芝の松方侯、麻布広尾の長與氏、上二番町の早川千吉郎氏、牛込の金堂廉平氏、市ヶ谷の小池恒三氏等にて(下略)」とした後に、建坪「長與邸 百五十坪」と記す。文中の「目白台の田中子爵邸」は松平春嶽の別邸の飯宅であり、また「三井家の今井町邸」は一説に明治三十九年完成、高輪の浅野総一郎邸は同四十年完成の紫雲閣と推定され、数年前に完成したものも含んでいる。この記事のみで長與邸の竣工を確定出来ないと考える。

(17) 『読売新聞』(一九一〇年五月十八日朝刊)と『朝日新聞』(一九一〇年五月十七日朝刊東京版、五月二十日朝刊東京版)に左記転居通知が掲載された。

転居

小生共左記の処へ転居仕候

麻布区富士見町廿三番地へ

長與称吉

電話芝二二八

(18) 明治四十二年『大日本私立衛生会本支会役員并会員名簿』(一九〇八年十二月三十一日現在)。また長與善郎は「称吉」一家は、己れの病院の近くに家を構え」(前掲註(12)長與書、二五頁)、「僅か三、四年でその借財を返済した上、自分達夫婦子供だけの新居をその病院の傍に建てるという繁盛ぶりであった」(同五二頁、ここでは登場人物を仮名としており、称吉を「弥吉」とする)と記す。

(19) 前掲註(6)参照。尚、長與善郎が記す腰越(神奈川県鎌倉市)の別荘は(前掲註(12)長與書)、片瀬(神奈川県藤沢市)と至近であることから同じ場所を示すと推測する。住所がいずれに属するかは不明である。

尾張徳川家麻布富士見町邸(上)

(20) 尾張家目白邸の場合、竣工は入居から一年後となっている。

(21) 「土地建物売買契約書」明治四十五年三月二十二日、長與立吉親権者長與延子代人、長與又郎、徳川義親代人桜井武愷、徳川黎明会総務部管理資料。

(22) 「土地建物売買契約書(前掲註(21)の一項(イ)に明治四十五年四月までに長與男爵家側で取り扱うものとして記録されている)。

(23) 『建築世界』(五一―一六―三、建築世界社、一九一二年)。図面の一部は「図面でみる都市建築の明治」(前掲註(13))所収。『建築世界』の閲覧について早稲田大学中央図書館のご協力を得た。

(24) 前掲註(13)参照。

(25) 称吉の家族については前掲註(3)参照。

(26) レッルに関しては以下の論文を参照した。

佐藤重夫「広島原爆ドームとヤン レッル」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会、一九六八年)。

市石英三郎「原爆ドームとヤンレット」(『建築雑誌』一〇〇二、日本建築学会、一九六八年)。

藤田文子「原爆ドームの設計者 JAN LETZEL」(『建築雑誌』一〇〇七、日本建築学会、一九六九年)。

藤田文子「チェコ人だった原爆ドーム設計者」(『世界』一九六九年八月号、岩波書店、一九六九年)。

雨野忍「空間の重層―広島県物産陳列館のデザイン構想」(『広島市公文書館紀要』一六、広島公文書館、一九九三年)。

「ヤンレットについてのレター」(『建築雑誌』一一七四、日本建築学会、一九八一年)。

外国人居留地比較研究グループ「ヤン・レットについて」(『ホテル・レビュー』五一二―五二五、五三七、五四四、日本ホテル協会、一九九三年)。

木村駿「デザイン 聖心女子学院創立百周年記念ホール(設計…安藤忠雄建築研究所、東京都港区)隣棟に張り出すホール階、間近の緑を借景に」(『日経アーキテクチュア』九〇三、日経BP社、二〇〇九年)。

『廣島から広島 ドームが見つめ続けた街』(広島県立美術館、二〇一〇年)。
Shinobu Amano Kikuraku, "JAN LETZEL ARCHITECT OF THE A-BOMB DOME" <http://www2.enjoy.ne.jp/~kikuraku/files/letzelhm>。
前掲註(15)菊楽論文。

杉本俊多「九一四「広島県物産陳列館」(原爆ドーム)の建築様式について」(日本建築学会中国支部研究報告集「三六、日本建築学会、二〇一三年」)。
菊楽忍「書簡集から建築活動をたどるー建築家ヤン・レツェルについて」(『東京都江戸東京博物館紀要』五、二〇一五年)。

矢田部順二「原爆ドームの来歴とヤン・レツェル・日・リチェコ文化交流史の視点から」(『修道法學』三九一一、広島修道大学ひろしま未来共創センター、二〇一七年)。

(27) 前掲註(26)外国人居留地比較研究グループ論文。

(28) 坂本勝比古「ドイツ人建築家G. デ・ラランデとその周辺」(『東京都江戸東京博物館研究報告』一三、二〇〇七年)。
前掲註(26)菊楽論文。

(29) 大日本私立衛生会の沿革について以下を参照した。
「一般社団法人日本公衆衛生協会の歩み」http://www.jpcha.or.jp/sub/pdf/menu01_1.pdf。
大日本私立衛生会『大日本私立衛生会一覽』(大日本私立衛生会、一八九五年)。

田波幸男「大日本私立衛生会の歩み」(『公衆衛生』三三一一、日本公衆衛生協会、一九六八年)。

瀧澤利行「大日本私立衛生会の民族衛生観」(『民族衛生』五七一一、日本民族衛生学会、一九九一年)。

坂上孝「公衆衛生の誕生ー「大日本私立衛生会」の設立と展開ー」(『経済論叢』一五六、京都大学、一九九五年)。

(30) 「大日本私立衛生会規則の摘要」明治二十年六月改正、(前掲註(29)『大日本私立衛生会一覽』)。

(31) 「大日本私立衛生会会員」明治二十八年四月現在(前掲註(29)『大日本私立衛生会一覽』)。

(32) 『大日本私立衛生会雑誌』及び読売新聞に以下の通り記録される。

臨時報告

一、本会ノ事務所ハ先年仮ニ從來ノ場所ニ設置シタル已来未ダ之ヲ確定セザリシガ今般将来ノ便宜ヲ謀リ役員会ノ決議ヲ経テ準備金ノ内金千八百八拾円ヲ以テ東京々橋区宗十郎町七番地ニ煉瓦家屋宅棟ヲ購入シ該所ヲ以テ事務所ト定メタリ

但経済上ノ都合ヲ量リ右家屋ノ内其半ハ一ヶ月ニ付拾六圓ノ貸料ヲ欲シテ他ニ貸渡シタリ

一、右二付今後諸種ノ照会等ハ同所ニ向ケ差出サレタシ
右報告候也

大日本私立衛生会

(『大日本私立衛生会雑誌』三八、大日本私立衛生会、一八八六年)

移転 本日左の地に移転す
東京々橋区宗十郎町七番地

大日本私立衛生会事務所(『読売新聞』明治十九年七月二十七日朝刊)
尚、京橋移転前は明治十六年五月二十一日から仮事務所を京橋区鎗屋町十一番地に置いている(『読売新聞』一八八三年五月二十四日朝刊)。

(33) 『読売新聞』一九〇五年八月二十七日朝刊。

(34) 「本会事務所移転に関する件」(大日本私立衛生会第二十五次総会報道速記録第一輯)(『大日本私立衛生会雑誌』二八九、大日本私立衛生会、一九〇七年)。

(35) 移転、売却については以下の記事がある。

本会事務所の移転

本会事務所は会務の都合上今回東京市芝区芝公園第七号地の十二へ移転せり

(『大日本私立衛生会雑誌』二八九、大日本私立衛生会、一九〇七年)
一、四十年五月二十六日本会第二十五次定期総会に於て予め承諾を得置きたる本会所有土地建物売却の件は日本貿易協会と急速に売買契約を締結し五月三十一日を以て其受授を了せり、其受渡し代価等は本年度本会総決算書中に詳かなり。一、前項の如く五月三十一日を以て本会所有土地建物を日本貿易協会に引渡したるに付五月二十八日評議員会の決議に基き六月以降事務所を東京芝

区芝公園第七号地に移転し、目下敷地剪定及建物新営の計画中なり

(第二十六年次報道速記録『大日本私立衛生会雑誌』三〇二、一九〇八年)。

大日本私立衛生会移転 同会は先達事務所を四万五千円にて売却せしを以て、新に同会事務所の出来る迄で、不取敢芝区芝公園第七号地へ移転せり、又同会新築地は宮内省の所轄某地の下附を申請中なりと。

(『医海事報』六七七、医海事報社、一九〇七年)。

かくの如くして協会は日ましに堅実なる発展を続け会員も年々増加して、従来の事務所が狭溢を感じて来たので、明治四十年六月に京橋区宗十郎町にあった大日本私立衛生会から土地及家屋を購入して早速移転したのであった

(浜田徳太郎編『日本貿易協会五十年史』日本貿易協会、一九三六年)。

本月三日を以て本会事務所を東京市芝区芝公園第七号地に移転す

明治四十年六月 大日本私立衛生会

(『朝日新聞』一九〇七年六月七日朝刊東京版)。

伝染病救済金庫、長興衛生文庫も同日同地に移転した。尚、金庫と文庫は明治四十二年十月二十八日に麴町区大手町一丁目に転居する。

(36) 『大日本私立衛生会新築落成式并に第二十九回総会記事』(大日本私立衛生会、一九一一年)。

『読売新聞』明治四十一年一月七日朝刊には、大日本私立衛生会公衆堂の設計がおり三月上旬より工事が開始する、敷地は芝公園内との記事があるが、この段階で決定していたとは思えない。

(37) 『大日本私立衛生会雑誌』三二〇(大日本私立衛生会、一九一一年)。

『大日本私立衛生会雑誌』三三〇「本年中本会重要記事摘録」(大日本私立衛生会、一九一一年)。

(38) 第二十七次総会(明治四十二年五月二十三日)第九雜件「大日本私立衛生会第二十七次総会記事 報道速記録」第一輯(大日本私立衛生会雑誌)三三四、一九〇九年)。

本会事務所其他新営敷地選定に就ては前年即明治四十年以来種々計画する所あり、遂に麴町区大手町一丁目所在(マ・・・)ヤンレッツルの設計を採用するに決し、目下詳細の仕様書作製を同人に依頼中なり。

尾張徳川家麻布富士見町邸(上)

(39) 前掲註(36)『大日本私立衛生会新築落成式并に第二十九回総会記事』。

(40) 近世式の珍らしい建築

麴町区大手町一丁目に建築中であつた大日本私立衛生会の建物は殆ど竣工した。昨年三月レツル、エンド、ホラ合資会社の手に起工したるもの写真の如く珍らしい建築で近世式といふ様式である。本館が百十七坪余の三階建て附属館はまだ出来ない、一階が会議室、便所、玄関等、二階が講堂三階が傍聴席に充て、ある。地所は御料地と内務省用地に属してゐる、主に衛生講話、会員集合等に用ひられる筈、会堂は六百人を入れ得る工費六万余円、来る廿五日に落成式を兼ねて第二十九次総会を挙行する。

(『読売新聞』一九一一年六月七日朝刊)。

疾病上の新報告▽新築落成せる衛生会にて

大日本私立衛生会が六万六千余円を投じて麴町区大手町に新築したる事務所は既報の如く欧米最新の様式に則りたる物にて東洋に於ては稀に見る建築なるが一昨日午後一時より其落成式を兼第二十九次定期総会を開催したり。

(『読売新聞』一九一一年六月二十七日朝刊)。

他に『朝日新聞』(一九一一年六月二十六日朝刊東京版)にも記事がある。

(41) 大日本私立衛生会による「本館貸渡規程」によれば、貸出は「衛生、教育、其他学芸又は慈善に関する集会等」に限られ、貸出料は一、二階併せて三十五円である。館内は土足厳禁、「見苦しき風体」も禁止され、喫煙、吐痰は場所が定められていた(『大日本私立衛生会雑誌』三三九、大日本私立衛生会、一九一一年)。

(42) 前掲註(29)『大日本私立衛生会一覽』。同書「大日本私立衛生会規則ノ摘要」(明治二十年六月改正)には「評議員の評議を以て会員中より審事委員を撰挙し会頭之を嘱託す」と記される。明治四十二年一月には囚獄衛生科・警察科・職業衛生科・嬰兒保育科・氣象科・博物科が増え二十三科となっている『大日本私立衛生会本市区役員并会員名簿』(明治四十一年十二月三十一日現在)。

(43) 「大日本私立衛生会ニ於テ衛生上実地調査ニ応スルノ旨意書」明治二十年三月創定(前掲註(29)『大日本私立衛生会一覽』)。

本会は従来審事委員を置き、会員の質問に応じ審査答解を為し来たりしか、自

今更ニ一步ヲ進め衛生上実地の調査に就き当分東京府下に限り左の需に応ずべし

- 一 一家内に於て陸続病災に罹り其原因不明なるもの
- 一 井戸便所下水等新築又は改造の際其構造位置に就き衛生上の調査を要するもの

(44) 『大日本私立衛生会本会役員并会員名簿』明治四十一年十二月三十一日現在(大日本私立衛生会、一九〇九年)。

(45) 安野彰・内田青蔵・藤谷陽悦「明治期の『大日本私立衛生会雑誌』にみる住宅の改善に関する言説」『特定領域研究「日本の技術革新」経験蓄積と地産知識基盤化」第二回シンポジウム研究発表会論文集』C-3、国立科学博物館、二〇〇六年。

田中祥夫「明治十年代、内務省衛生局による建築法制の推進について——連の長屋・家屋建築規則の成立要因」『日本建築学会計画系論文報告集』四〇五、日本建築学会、一九八九年。

田中祥夫「明治十九、二十年、東京府による長屋建築規則案の不成立におわる経緯とその理由について——東京府の立案文書の検討より」『日本建築学会計画系論文報告集』三〇九、日本建築学会、一九八八年。

(46) 『大日本私立衛生会雑誌』二九〇(大日本私立衛生会、一九〇七年)。

(47) 平山育男「滝大吉の慰霊祭——三年祭 十周忌慰霊祭——資料について」『日本建築学会技術報告集』二五—六〇、日本建築学会、二〇一九年。

(48) 前掲註(34)「大日本私立衛生会第二十五次総会報道記録第一輯」。また大日本私立衛生会会頭土方久元は落成式において「規模宏壮ならず設備亦整齊ならざるものと雖も本会か始めて茲に理想的会堂を有し以て会務の遂行に便するを得」との式辞を述べている(前掲註(36))『大日本私立衛生会新築落成式并に第二十九回総会記事』。

(49) 前掲註(35)『日本貿易協会五十年史』。尚、大日本私立衛生会旧会堂(京橋区宗十郎町)の写真が学校法人北里研究所に所蔵されており、閲覧に関して太久保美穂子氏はじめにお手間をかけた。写真は同研究所所内報「The Kitsato」五十二号(北里研究所、二〇〇六年八月)に掲載される。

(50) 「大正十二年には関東大震災がおこり、衛生会の建物はすべて焼失するという悲運に遭遇することになった。翌十三年一月によりやく旧位置に事務所を仮設することとなった」(『公衆衛生の発達——大日本私立衛生会雑誌鈔』財団法人日本公衆衛生協会、一九六七年)。被災した大日本私立衛生会会堂の写真は『関東大地震震害調査報告』第三巻 橋梁・建築物之部 第二編建築物に掲載される。掲載写真は土木学会附属土木図書館より提供を受けた。

(51) 弟の長與又郎(東京帝国大学総長)によれば、称吉は明治十七年十八歳の時にドイツに渡り、同二十六年九月に帰国したという(前掲註(4))『日本医事新報臨時増刊 近代名医一タ一話』一)。

(52) 『建築雑誌』と『読売新聞』の記事は左記の通りである。

○建築学会主宰にて建築図案展覧会の公開を望む

我国の美術界を観察するに彫刻絵画界の人々は比較的に活動するので文部省に於ても既に年々公設展覧会を開催し其成績の見るべきものあるは既に定評あり、近くは公設美術館建設の議其他大に歩を進めつ、ある有様である、然るには建築界を省みれば如何である、我が建築学会の如き基礎鞏固なること此種他に比類なき期間を備へて居り立派な博士も学士も多数お揃ひでありながら、公共的活動には馬耳東風の有様である、之れは如何なものにや、(中略)一体建築は美術の主であるから従て建築を専門とする学者諸君は飽くまでも美術上には主たる理想を以て臨まねば相成るまいと思ふ、故に我が建築学会の如きは率先して此方針を以て社会に臨み一面国家に對すに義務を尽すと共に他方には公衆の建築に對する常識発達を導き大に活動せざるべからざる事と信ぜられる、就ては其事業としては多事故拳に違あらざれども端緒として最も急を要するものは我建築学会主宰の許に標題の如き建築図案展覧会を公開するにありとす、之れ現今斯界の爲め天下の形勢を觀破せる一大重要事件と信ず、依て建築学会幹部並に会員諸君と共に此企図の実現を速かならしめん事を希望して余白を没す

〔の生〕「建築学会主宰にて建築図案展覧会の公開を望む」『建築雑誌』二二七八、日本建築学会、一九一〇年。

初めての建築図案展覧会 昨日開会せし東京府勸業展覧会に於ける建築図案展覧会の必要と云ふ事は既に二三年前から二三の建築家によつて唱へられてゐ

た事である。記者の記憶によると、一昨年の七月建築学会で田邊淳吉氏が「東京市区改正の状態と建築常識」と題して講演した際も、酒井祐之助氏が展覧会の必要を述べてゐる。又昨年同会で「我が国将来の建築様式を如何にすべきや」と云ふ題の討論会をやった時分にもこれに及んだ人がある。ついで最近には朝日紙上で徳大寺、高松の両工学士が熱心に論じた（筆者註『朝日新聞』一九一〇年十二月七日・八日朝刊東京版）。記者も当時既に建て了つた建築に對して批評を試みて其の多くが非難せられねばならぬものであつた時に、まだ建てられぬ建築図案の展覧会が必要だと云ふ事を痛切に感じたのであつた。この意味で住宅ばかりではあるが古宇田実氏の「時代の家屋」は一種の展覧会として頗る有益な企であつた。然るに今や既に多くの人が希望してゐた建築図案展覧会が開かれた。即ち二十日に開会した東京府勸業展覧会に於いて、美術部の内に初めて建築の分類が設けられ、彫刻や絵画と肩を並べるに至つたのである。

（『読売新聞』一九一一年三月二十一日）

（53） 黒田鵬心「東京勸業展覧会の建築図案」（『読売新聞』一九一一年五月十日朝刊初出、『都市の美観と建築』趣味叢書發行所、一九一四年）。

（54） 中里一郎編『博覧会協会史』（日本産業協会、一九二二年）には、社団法人博覧会協会（後の日本産業協会）設立後の第二回東京勸業展覧会以降の記録しかない。第二回は明治四十五年三月二十日から五月二十日に同じく上野公園不忍池畔東京勸業協会陳列館で行われ、出品者一八五七人、出品点数一九二二四点であつた。第二回東京勸業展覧会にはヤンレツルエンドホラ合資会社からの出品はない（『建築図案集 東京勸業展覧会出品 第二回』建築世界社、一九一二年）。

（55） 展覧会評として『読売新聞』、『朝日新聞』と『建築世界』の記事をあげる。然るに今や既に多くの人が希望してゐた建築図案展覧会が開かれた。即ち二十日に開会した東京府勸業展覧会に於いて、美術部の内に初めて建築の分類が設けられ、彫刻や絵画と肩を並べるに至つたのである。尤もこの計画を聞いた當時は、始めての事ではあるし、又従来美術部の振はなかつた東京府展覧会の事であるから、或は建築の部も出品がなく空しく白壁を残しはしまいかと憂へたのである。所が開会当日見ると中々沢山の出品で百以上に及んでゐる。記者はこの現象を見て大に喜ぶ（中略）次に主なる出品は大なるものでは中央停車場の

立図（辰野葛西事務所設計）が巾二間以上を占めてゐる。珍らしいものでは飛行機及び飛航船庫がある、是れは内田（祥三）瀧田亮工学士の設計だ、それから伊藤公銅像の臺（武田工学士設計）、ジューの墓（レツツエル及びホラ氏設計）夏の家（葛野工学士設計）等が人目をひく。又村井銀行（吉武氏設計）は模型を出してゐる。何れ猶よく見た上で批評もする積りであるが、とにかくこの好結果をみて吾人は文部省展覧会にも建築の部の設けられん事を希望するものである。或るは又私設ならば建築だけ独立した展覧会の開設を希望する。開会の二三日前辰野博士との話の中にも、独立せねばならぬと云はれ、中條工学士も其の意見に熱心に賛成された。

（『読売新聞』一九一一年三月二十一日朝刊）。

展覧会巡覽 東京勸業展覧会（二）建築図案

従來の慣例を破つて建築を美術部に加へたるは一進歩なり夫れが為め専門家の發奮を得て多数の出品を見たるは斯道の為め喜ぶべし、就中建築学会有志の出品多し、又出品中に実地建築の設計図多きは一般觀者の注意を惹くに便なり

（『朝日新聞』一九一一年四月二十二日朝刊東京版）。

◎東京勸業展覧会

不忍池畔の東京勸業展覧会は去月二十日午前十時開会式を挙行した、式は同館樓上にて行はれ大浦農商務大臣始め文相代理眞野実業事務局局長等臨席し昌谷東京府内務部長は幹事として開会を告げ中野会頭の挨拶に次で農相、文相、知事、市長其他商業會議所（東京、大阪）会頭、実業連合組合頭取等の祝辞があつて來賓は場に溢るゝの盛況を呈した。

当日は未だ出品も揃はぬが（中略）最も特筆すべきは建築図案である。是は建築学会其他の重なる技術家が挙つて出品したので前例なき多数に上り中央停車場設計図始め飛行機格納庫図案伊藤公銅像の臺（武田工学士設計）ジューの墓（レツツエル及びホラ氏設計）夏の家（葛野工学士設計）等人目を惹くものが夥しい、確に此会の特色と云つてよい表装陳列も此種の会の出品としては始めてある

（『建築世界』五一四、建築世界社、一九一二年）。

（56） 『東京勸業展覧会出品建築図案集』（建築世界社、一九一一年）。

（57） 前掲註（56）『東京勸業展覧会出品建築図案集』。「商店建築」は横浜開港資料館によれば明治四十二年十二月二十八日焼失したオッペンハイマー商会の再建築

であり、建築されなかったという(横浜市総務局横浜開港資料館『開港のひろば』二七、横浜市総務局横浜開港資料館、一九八九年)。

(58) 『朝日新聞』一九一一年四月二十二日朝刊東京版。

(59) 黒田鵬心はレッツルの出品作について「外人の墓は変つて面白いと思つた丈け」(外人墓地)、「レッツエル及びホラ氏の商店も近世式で、装飾を盛に用ひてあるが、日本人の趣味には適すまいかと思ふ。兎に角その一人たる自分には余り難有くないものだ」(商店建築)と記す。また聖心女学院に関しても「其の表現が自分等の趣味には合ひかねる」、「レッツエル及びホラ氏の長與男爵邸は渋いやうな少し陰気なもので、これも自分の趣味に合はない」とする(黒田鵬心「東京勸業展覧会の建築図案を評す」(上)(下)『読売新聞』一九一一年五月十一・十二日朝刊)。

(60) 「東京府勸業展覧会建築部概観(某工学博士談)」、『建築世界』五一五、建築世界社、一九一一年。

(61) 前掲註(15)菊楽論文、図六。

(62) 前掲註(12)長興書。同書では本名と仮名の両方が使用されており、ここでは称吉を「弥吉」とする。

(63) 外国人居留地比較研究グループ「ヤン・レッツルについて(一)」(『ホテルレビュー』五一二、日本ホテル協会、一九九三年)。

(64) 諸橋英一「第一次世界大戦期の対敵取引禁止政策と日本―総力戦と経済制裁―」(『国際武器移転史』四、明治大学国際武器移転史研究所、二〇一七年)、同「第一次世界大戦期における対敵取引禁止政策の諸相…日本と国際経済の一断面」(『法政論叢』五四―一、日本法政学会、二〇一八年)。

(65) 東郷茂彦『祖父東郷茂徳の生涯』(文藝春秋、一九九三年)。

(66) 「御住居之沿革」個人蔵。小石川水道端邸は明治四十年一月田中不二磨より購入、同年八月三十一日米子が市谷仲之町より移住、同四十一年十二月四日義禮夫人良子名古屋より移住。義親と米子の結婚(同四十二年十一月)を承けて、同年十二月十二日から義親も市ヶ谷仲之町御学問所(一溪舎)から移住した。小石川水道端邸は義親が幼時を過ごした越前松平家の安藤坂邸、目白坂邸の間に位置し、義親にとつても馴染みのある地域であつたと思われる。

「御住居之沿革」は主に明治維新以降の尾張家の本邸・別荘を記録しており、麻

布富士見町邸売却までが記されることから、昭和六年(一九三二)以降第二次世界大戦前に尾張家で成立したと推定される。

(67) 双芝仙館については西尾豊作『子爵田中不二磨傳』(咬葉塾、一九三四年)に言及がある。

(68) 本邸は当主の本籍地となつており、大正九年(一九二〇)八月一日に義親が本籍を名古屋・大曾根邸から麻布富士見町邸に移すことにより麻布富士見町邸が本邸となつた。

(69) 浅草瓦町邸は明治三年四月二十九日築地屋敷の代邸として下賜された旧上田藩藤井松平家邸である。同四年慶勝と義宜が上京し最初に本邸となつた。手狭であつたため、翌年には本所相吉町邸に移転し、別邸として使用、同二十八年から三十五年まで矩子と米子が暮らし、矩子逝去後、米子は市ヶ谷仲之町の借家で家庭教師棚橋絢子と暮らした。浅草瓦町邸は貸地となり、大正十二年九月の関東大震災で全焼、昭和十六年十二月に全敷地が売却された。本所相吉町邸は本所横網町邸に移転(明治十二年)の後手放し、本所横網町邸は同二十八年分家の徳川義恕に分譲されている。義親の御学問所一溪舎と米子の暮らし市ヶ谷仲之町邸(借家)は隣地であるが別宅であり、市谷仲之町邸は米子が引越して後に返還され、一溪舎は後に義知、義龍の学問所として機能した(徳川米子聞き取り調査資料、「御住居之沿革」個人蔵)。

「徳川米子聞き取り調査資料」は平成十二年「むかしの徳川家を語る会」(後掲註(80)参照)参考資料として尾張家二十一代義宣よりコピーを預かつた。原本の所在及び実施された年月日は不明である。

(70) 註(69)徳川米子聞き取り調査資料。水道端邸の滅失登記の記録には木造瓦柿交葺平家と記録される(建物滅失に付き登記申請)昭和十一年七月八日、徳川黎明会総務部管理)。

(71) 『東京都港区近代沿革図集 麻布・六本木』(東京都港区立三田図書館、一九七七年)。

(72) 明治五年、麻布富士見町内に華族の邸宅はなく、士族八戸、平民四戸、僧侶二戸、寄留士族一戸、寄留平民二戸の計十七戸七十六人しか居住しない。それが大正十四年には四百六十四世帯二千二百二十九人へと増加し、麻布区の人口は昭和

四年には二万二千戸、十万一千人に及んでいる(『麻布区史』 東京市麻布区役所 一九四一年)。

(73) 「自明治年 御相談会決議録綴込及重要議案」 徳川黎明会総務部管理。

(74) 前掲註(29) 「一般社団法人日本公衆衛生協会の歩み」。

(75) 永井久一郎『衛生二大工事…巡欧記実』(忠愛社、一八八七年)。

(76) 前掲註(69) 「徳川米子聞き取り調査資料」。

(77) 前掲註(21) 「土地建物売買契約書」。

(78) 大正元年九月九日高橋新吉より接続地九百十六坪(畑及山林)を購入、同二年四月二十三日古川はつより宅地四〇六坪を購入。「麻布富士見町邸契約書」 徳川黎明会総務部管理。

(79) 前掲註(21) 「土地建物売買契約書」。

(80) 「むかしの徳川家を語る会」。「むかしの徳川家を語る会」は、平成十二年(一九九八)七月二十三日と十六年四月二十三日に第二十一代義宣主催で旧徳川義知邸にて開催された。長女絹子・次女春子・三男義龍・三女百合子の四人から主に麻布富士見町邸での生活について聞き取りが行われ、筆者は同席してその書き起こしを担当した。この二回目に絹子が記憶に基づき記したという手書きの麻布富士見町邸の見取り図を持参した。今回の復元図はこの時筆者が徳川義宣と上司・久富修と共に検討していた内容に、新たに発見された図面等の追加により再検討を加え修正したものである。

(81) 転居した当初の麻布富士見町邸と思われる現存図面は以下の通りである。

「徳川邸実測図」(大正四年十月 B-2-1-1-2)、「本館平面図」(渡邊仁工務所 一枚 B-2-2-1-6)、「日本館平面図」(B-2-2-1-5)、「配電図」(一枚 B-2-1-1-9)、「配置図、平面図」(むかしの徳川家を語る会 二枚 B-2-1-7)。いずれも尾張徳川家・公益財団法人徳川黎明会・八雲産業株式会社共有資料。

(82) 前掲註(80) 「むかしの徳川家を語る会」。

(83) 当時の家職定員は家令一人・家扶二人・家従九人・家丁四人・給仕二人・馭者一人・門衛一人・小使四人・馬丁二人・車夫三人である。家扶二人が庶務課、会計課の各課長を務めており家従が各課についている(五味末吉調「徳川家々法

其外調書」(個人蔵)。

(84) 大正三年(一九一四)、義親は東京帝国大学理科大学植物科を卒業し、植物学研究室を創設した。同五年に府下荏原郡平塚村小山の土地を購入し、建物は同七年に竣工、同年四月十四日麻布富士見町邸から圖書、器具などが移動され、荏原での生物学研究所の活動が開始した。また同十二年、林政史研究室が邸内に設けられた。いずれの年代も建物新築記録がない。尚、昭和二年の増築後、役宅Ⅰ(29)脇に番号のない建物がある。麻布富士見町邸から引越す際に林政史研究所書庫が「坂下」にあったとの記述があることからこの建物が該当する可能性を考えたが、裏付けできる資料は確認できていない。

(85) 「御住居之沿革」(個人蔵)。

(86) 五味末吉調「徳川家々法其外調書」(個人蔵)。尾張家は浄土宗であるが、明治七年五月に神道へ改宗、この時に本邸内に「神殿」が作られた。同三十二年五月に再び宗旨は仏教に復帰したが、葬儀を神式とし、「神殿」は残されていた。大正十二年四月全御霊を仏教で奉祀することに改定され廃止となった。

(87) 前掲註(80) 「むかしの徳川家を語る会」。

(88) 鎌倉別荘については記録がない。絹子は外人建設の洋館で「ベッカーさんの家」としており、鎌倉・由比ヶ浜の「小林米珂荘」または米珂関連の建物の可能性があると考える。鎌倉別荘は関東大震災で壊滅的被害を受け、もし滞在していれば命はなかったと義龍が回想している(前掲註(80) 「むかしの徳川家を語る会」)。

(89) 徳川義親「最後の殿様」(講談社、一九七三年)。被害状況等は「大正十二年九月 震災に関する書類 徳川家」(徳川黎明会総務部管理)を参照した。

(90) 義知は大正十二年七月二日より仲之町御学問所で生活し、翌年六月十七日から義龍も同所に生活拠点を移動している。昭和三年十月義知は麻布富士見町邸に戻るが、義龍はその後市ヶ谷で暮らし、同八年二月、市谷仲之町の不動産は義龍に分譲されている(「御住居之沿革」(個人蔵))。

(91) 計四十四名が本邸、六軒の役宅、大工小屋、供待に分かれて滞在していた(前掲註(89) 「大正十二年九月 震災に関する書類 徳川家」)。

(92) 大正十年三月「徳川義親侯御邸改築工事設計図面」 尾張徳川家、財団法人徳

川黎明会、八雲産業株式会社共有資料。

(93) JACAR(アジア歴史資料センター)Ref:B14090645500「在本邦各国公館関係一件(建物転貸関係ヲ含ム)仏国ノ部」(外務省外交資料館所蔵)。

(94) 「徳川邸改築工事設計図」(一枚、B-2-2-7、尾張徳川家・公益財団法人徳川黎明会・八雲産業株式会社共有資料)及び「麻布富士見邸敷地配置図昭和二年十二月」(註93、「御住居之沿革」(個人蔵を参考とした)。

(95) 前掲註(3)『国際建築』。

(96) 前掲註(80)「むかしの徳川家を語る会」で絹子・春子の言及がある。

(97) 昭和二年の「徳川義親侯爵邸敷地配置図」には馬場とテニスコートがないことから、これ以降の新設と思われる。馬場・テニスコートについては「むかしの徳川家を語る会」(前掲註(80))で言及があり、テニスコートについては写真が、庭及び池泉については図面が残っている。

(98) 前掲註(3)『国際建築』。

(99) 「徳川米子聞き取り調査資料」(前掲註(69))によれば、昼休みに工員がこぞつて屋根に上がり、双眼鏡で麻布富士見邸内を観察する状況にあったという。尚、この工場とは共立電機電線株式会社(現在のアンリツ)と推定される。共立電機電線株式会社とは敷地境界や排水などでも争議があった。

(100) 青木信夫「大正・昭和戦前期の東京府における皇族・華族の居住地の変遷」(『一九九八年度第三十三回日本都市計画学会学術研究論文集』、日本都市計画学会、一九九八年)。

(101) 前掲註(72)『麻布区史』。

(102) 財団設立及び美術館建設についてはこれまで左記の通りまとめた。「徳川義親の美術館設立想起」(『金鯢叢書』四一、二〇一四年)、「明倫博物館から徳川美術館へ―美術館設立発表と設立準備」(『金鯢叢書』四二、二〇一五年)、「尾張徳川美術館」設計懸賞」(『金鯢叢書』四三、二〇一六年)。

(103) 後藤新平邸(麻布区桜田町五十番地)ではアントニン・レーモンド設計の洋館一棟、日本館一棟、土蔵一棟、門衛一棟、二戸建長屋一棟、自動車庫一棟を借用した。借用期間は昭和六年二月十五日の契約書では同日より翌年八月十五日迄(後藤家借家契約書)徳川黎明会総務部管理)、実際には昭和七年十一月二十八

日まで使用した。

(総務部 非常勤学藝員)

【図版典拠】

挿図1、3、17、18、21、22 麻布富士見邸写真 昭和六年(一九三二)二月一日撮影 個人蔵(八雲産業株式会社管理)。

挿図2、5、6-1、7、8 長與男爵邸(建築世界)5-11-6-3 建築世界社

明治四四-四五五年)。

挿図4 長與称吉「日本医事新報臨時増刊 近代名医一夕一話」一(日本医事新報社 一九三七年)より転載。

挿図6-2 長與男爵邸本館平面図二階 鈴木博之・初田亨編『図面でみる都市建築の明治』柏書房、一九九〇年)。

挿図9、10 大日本私立衛生会(『建築世界』5-8-10、建築世界社、明治四四年)。

挿図11 大日本私立衛生会被害状況『関東大地震震害調査報告』第三卷 橋梁・建築物之部 第二編建築物 掲載画像、土木学会附属土木図書館所蔵)。

挿図12 麻布富士見邸周辺(明治二〇年代)

(内務省地理局「東京実測図」明治二〇年『東京都港区近代沿革図集 麻布・六本木』東京都港区立三田図書館 昭和五二年より筆者作成)。

挿図13 麻布富士見邸敷地配置図(大正四年十月)

「徳川邸測量図 大正四年拾月測量 東京地籍測量社」より筆者作成。

挿図14 尾張徳川家麻布富士見邸平面図

「本館平面図」麻布徳川邸図面B-2-2-6(註81参照)より筆者作成。

挿図15 麻布富士見邸日本館復元図

「徳川邸測量図 大正四年拾月測量 東京地籍測量社」より筆者作成。

挿図16 麻布富士見邸敷地配置図(昭和二年十二月)

JACAR(アジア歴史資料センター)Ref:B14090645500「在本邦各国公館関係一件(建物転貸関係ヲ含ム)仏国ノ部」(外務省外交資料館所蔵)より筆者作成。

挿図19、20、23 麻布富士見邸新館(『国際建築』4-1-1、昭和三年、美術出版社)。

挿図24 麻布富士見町邸集合写真 昭和六年（一九三一）二月七日撮影 個人蔵（八雲産業株式会社管理）。

表1 長與邸から麻布富士見町邸の建物の変遷

	建物名	構造様式	用途	長與邸		麻布富士見町邸				備考
						前半期		後半期		
				建物の有無	各階面積(坪)	建物の有無	各階面積(坪)	建物の有無	各階面積(坪)	
1	本館	木骨鉄網コンクリート	住宅	○	80.5(1階) 79.2(2階) 地階坪数不明	改装 (3階増築か)	坪数不明	3階 不使用？	78.346(1階) 80.18(2階)*1 地階8.888	
2	新館	木骨鉄網コンクリート	住宅	—		—		○	137.746(1階) 93.083(2階) 7.50(地階)	
3	書院	木造和風	住宅	○	146.95	一部利用	坪数不明	一部利用	48.075	目白邸に移築
4.1	御後室様御間	木造和風	住宅	—		○	15.5	継続利用	31.994 *2	目白邸に移築
4.2	御子様御間	木造和風	住宅	—		○	56.165	—		
4.3	事務所はじめ	木造和風	住宅	—		○	60(1階) 13.75(2階)	—		
4.4	女中部屋はじめ	木造和風	住宅	—		○	63.7	—		
5	倉庫B	鉄筋コンクリート	倉庫	—		○	坪数不明	継続利用	各12.5 (1階、2階)	
6	物置A	木骨トタン板張	物置	—		—		○	30	
7	物置B	木骨トタン板張	物置	○	12.5	○	坪数不明	継続利用	13.5	
8	物置C	木骨トタン板張	物置	—		○	坪数不明	継続利用	6	
9.1	倉庫A	煉瓦造	倉庫	○	各8.75 (1階、2階)	継続利用		—		
9.2	倉庫C	木骨鉄網コンクリート	倉庫	—		—		○	各21 (1階～3階)	
10	物置D	鉄筋コンクリート一部木造	物置	—		○	坪数不明	継続利用	鉄筋4.00, 木造2.25	
11	小使部屋	木造和風	小使部屋	不明		○	坪数不明	○移築または再建	5.25	
12	洗濯場	木造和風	洗濯場及 冷蔵庫	○	6(洗濯場)	冷蔵庫増築	7.3(増築)	○	12.5	
13.1	門番所A	木造平家	門番所	○	12	継続利用	坪数不明	—		
13.2	門番所B	木骨鉄網コンクリート	門番所	—		—		○	7.5	
14	馬屋	木造和風	馬屋	不明		○	坪数不明	継続利用	6.75	
15	供待	木造和風	供待	不明		○	坪数不明	継続利用	5.25	
16	ガソリン庫	石造	ガソリン庫	—		○	坪数不明	継続利用	1.6	
17	便所	木造和風	便所	○	0.65	継続利用？	坪数不明	継続利用	0.75	
18	自動車庫	木骨鉄網コンクリート	自動車庫	—		○	坪数不明	継続利用	10.75	
19	役宅A	木造和風	役宅	—		○	13.25	継続利用	11.5	
20	貸家	木造和風	住宅	—		—		○	46.916	
21	茶席	木造和風	茶席	—		○	6.34	継続利用	5.5	目白邸に移築
22	役宅B	木造和風	役宅	—		古川邸	43.5(1階) 12.5(2階)	○	45.25(1階) 12.5(2階)	
23	役宅C	木造和風	役宅	—		○	25.38(1階) 12.375(2階)	継続利用	25.5(1階) 12.5(2階)	
24	役宅D	木造和風	役宅	—		水道端邸より移築	39.5	○	22.5	
25	役宅E	木造和風	役宅	—		—		○	26.75	
26	役宅F	木造和風	役宅	—		○	57(1階) 27(2階) 計三棟	継続利用	3棟各 18.5(1階) 9(2階)	
27	役宅G	木造和風	役宅	—		○		継続利用		
28	役宅H	木造和風	役宅	—		○		継続利用		
29	役宅I	木造和風	役宅	—		—		○	18.25	
30	温室	木造平家	温室	○	4.04 *3					
31	廊下	木造平家	廊下	○	2.32 *4					
32	長屋	木造平家	長屋	○	17.5 *5					
33	植木室	木造平家	植木室	○	51 *6					

各階面積は長與邸は明治45年3月22日付「土地建物売買契約書」、麻布富士見町邸前半期は「御住居之沿革」、後半期は昭和2年12月現在「徳川義親侯爵邸敷地配置図」から記した。

*1 一階と二階の数字が逆に記されているのではないかと推定する。

*2 坪数の増加は増築ではなく、「徳川邸改築工事設計図」で仮移築されている不明の部分が、「御後室様御間」と組み合わせることで使用されていると思われる。

*3 この温室は本館西側に付属する温室をさすと考えられ、以降は本館の坪数に含まれていると考える。

*4 本館と日本館接続部分であると考えられ、以降日本館部分に加算されていると推定する。

*5 この長屋については売却以降記録がなく、尾張家で撤去したかと思われる。

*6 植木室については明治43年4月中に長與家側で撤去することが契約に定められていた。

金 鯨 叢 書 第四十八輯 [年一回刊行]

——史学美術史論文集——

令和三年三月三十日 編集
令和三年三月三十日 印刷・発行

編集者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川義崇海

発行者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会
電話(3950) 〇一一一番(代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所
電話(3950) 〇一一七番(代)

〒461-0023 名古屋市東区徳川町一〇一七
徳川美術館
電話(935) 六二六二番(代)

印刷所

〒605-0089 京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版
電話(533) 六八六〇番(代)